

2024年度郷土歴史講座

「増林地区南部の歴史」

—増森村・中島村・小林村・花田村—

講師 加藤 幸一 氏

(越谷市文化財調査委員会 委員)

	日程	時間	内容	場所	備考
第1回	5月8日(水)	午後2時 ～午後4時	講座	市立図書館 2階 視聴覚ホール	Aコースの方は必ず受講してください
第2回	5月15日(水)				
第3回	5月24日(金) または 6月5日(水)	午前9時 ～午後5時 (予定)	現地研修 (バス乗車&徒歩) *雨天決行	越谷界限	各日同一内容 <u>日にちを選択</u> してください

<Aコース> **講座**と**現地研修**の計3日間(第1回～第3回)
第3回の各日17人定員(第3回は日にちを選択)

<Bコース> **講座**のみの計2日間(第1回と第2回) 16人定員

○費用 無料

○申込期間 4月11日(木)午前10時～4月25日(木)

○申込方法 電話(965-2655)または電子申請

○申込内容 氏名・電話番号・希望コース

(Aコースは第3回の日にちを選択)

◎定員超えの場合 抽選を実施

◎申込結果の連絡 **当選者にのみ**図書館から

電話またはメールで通知

あて先・問い合わせ先 〒343-0023 越谷市東越谷4-9-1
越谷市立図書館 郷土歴史講座担当【電話 048-965-2655】

埼玉郡之四 越ヶ谷領

○花田村 花田村は家数四十八、東は増林村、南は小林村、西は越ヶ谷宿、北は大沢村なり、東西十五町、南北二十町許、当所も古より御料所なり、江戸への里数、元禄の検地等、前(大沢村)に同じ、古へ小林村の界に元荒川続の川ありしが、(花田村は)寛延三年(一七五〇)新開の地となりてより、塩谷八太夫、岩松直右衛門等糺す(改め直す)、高札場 村の南にあり

稻荷社 村の鎮守とす、西円寺持、下(第六天社)同じ、○第六天社

西円寺 新義真言宗、瓦曾根村照蓮院末、開山を蓮花房長音と云、本尊正観音を安ず、薬師堂

※花田村の鎮守の稻荷社は、山本泰秀氏による聞き取り(昭和22年生まれ、松沢憲一氏)によれ

ば、花田第二樋門の真東、約百三十坪先の少し南の地点、花田3丁目11にあった。また、

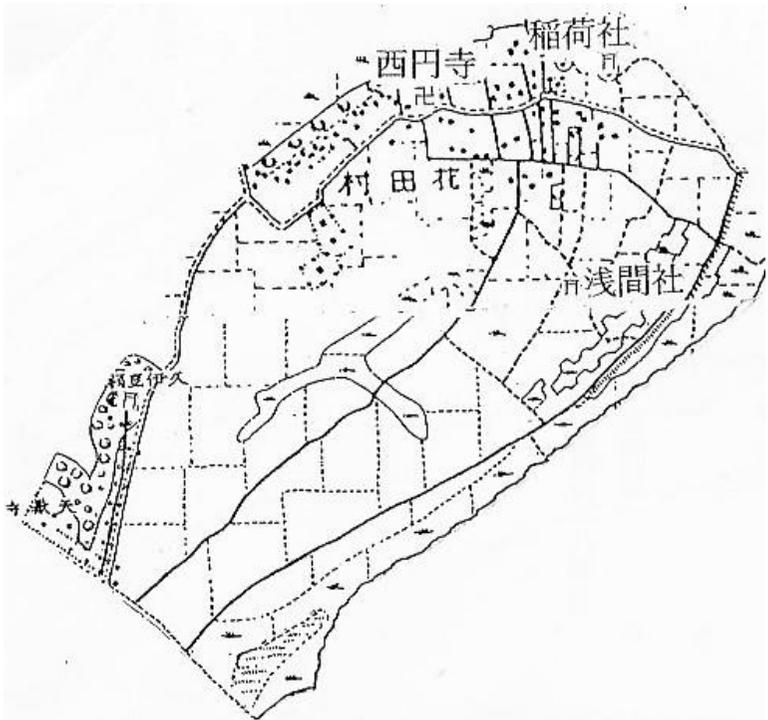
第六天社は、その稻荷社の東に離れてあった(昭和17年生まれ、黒田丈夫氏)。

※西円寺は花田一丁目自治会館そばにある。西円寺の境内には、入口入って右側に参道に向けて立派な稻荷社が建っているが、これが移転してきた花田村の鎮守・稻荷社である。

※西円寺の薬師堂は、入口入って左側に参道に向けて建っている。堂内を開けるのは良くないと伝わってきている。

※なお、花田には浅間社もみられたが、山本氏による聞き取り(松沢憲一氏)によると、花田の南の端、花田と越ヶ谷の境の田んぼの中にあったという。花田苑の門から真西、約三百坪先の少し北の地点、花田5丁目14にあった。

花田の寺社の地図



明治13年測量の迅速測図に
寺社の記号と名称の文字を
わかりやすく書き換えた。
加藤幸一

埼玉郡之八 新方領

○小林村 小林村は江戸の行程検地など前村（大房村）に同じ、東西南北共四町、南は元荒川を隔て瓦曾根村・西方村、西は葛西用水堀を越て越ヶ谷宿及び花田村、東は増林村、北も花田村なり、民戸百七軒、按岩松文書文永三年（一二六六）の者に、小林村の名をの（載）す、当村の事ならんか、されど郡内菫蒲領及荏原郡にも此名あれば、定かには云難し、用水は瓦曾根村より引来り、古より御料所なり、其余花田村境に新田※あり、寛延三年（一七五〇）塩谷八太夫・岩松直右衛門検地せり、

※元荒川の古川の地の村境が新田となっている。

高札場 中程にあり

小名 根郷組 野中組 高曾根組

元荒川 南の方を流る、幅二十間許、

神明社 村の鎮守なり、○水神社 村民の持

※神明社は東福寺の北隣りにある。その北には道路を隔てて香取社があり、その香取社は境内が広く、明治8年の「埼玉郡村誌」によると「村社」（江戸時代の鎮守に当たる）となっている。一方、神明社は「平社」と書かれ「村社」ではない。神明社は境内が狭いので、

広い境内のある香取社の方が鎮守にはふさわしく、江戸時代も鎮守であった可能性が高い。

※水神社は、小林村の瓦曾根溜井沿いの会田家の南西の瓦曾根溜井の小島に祀られていた。

東福寺 新義真言宗、瓦曾根村照蓮院末（末寺）、小林山と号す、中興僧快春延宝七年（一六七九）

正月化す（没する）、本尊虚空王蔵、鐘楼 寛政三年（一七九二）の鐘をかく（掛く）、

薬師堂 ○蓮乗院 同宗同末（東福寺末寺）、下並に同じ（以下にあげる東光寺・観音寺も同じ）、摩尼山と号す、本村地蔵を安ず（安置する）、○東光院 薬王山と号す、本尊薬師、

○観音寺 無量山と号す、本尊十一面観音を安ず、香取社 ○観音堂 東福寺の持、

※薬師堂は、東福寺の境内地の参道東側沿いにある。

※東光院は、東越谷三丁目の北西角あたりにあった。

※観音寺は、香取神社本殿の北東、東越谷一丁目一四にあった。ここに観音堂があった。

※香取社 明治8年の「埼玉郡村誌」によると、小林村の村社（江戸時代の鎮守にあたる）となつている。現在、地元では、「小林の鎮守」を現代風に「東越谷の総鎮守」と称し、古くからの村の鎮守としてとらえているのであろう。

※東福寺の本堂の北東裏に第六天のお堂が小山の上にあった。

○増森村 増森村は江戸への里数七里、民戸百三十、西は増林村、南は元荒川を隔て、東方村に接し、東北は古利根川を廻らし、川を越て葛飾郡川藤下・赤岩二村なり、東西六町、南北十五町、用水は増林村より引けり、御入国以来御料所（幕府の直轄領）にして、検地は前村（小林村）

と同じく、元禄八年（一六九五）酒井河内守糺せり（改め直す）、

高札場 北の方にあり

小名 西川組 新田組

古利根川 東北を流る、幅十四間許、○元荒川 西の方を流る、幅廿五間、○千間堀 村の中程を流る、岩槻領諸村の悪水落にて、末は古利根川に入、

香取社 東正寺持 ○水神社 金蔵院持、以上二社村の鎮守なり、○辨天社 真正寺持

○第六天社 清学院持 ○稻荷社四宇 一は東正寺、一は観音寺、外二社は清学院の持なり、

※香取社は、武蔵国埼玉郡村誌によると、「村の西方字二枚口にあり」と記述されている。

明治になると平社になる。宝正院の西三六〇^以地点の道路の北側に最近までその名残があったが、現在は見当たらない。

※東正寺は、明治四十四年に増林の下組にある宝蔵院を合わせて、宝蔵院の「宝」と東正院の「東」をとって現在名の宝正院に改めた。

※水神社は、現在の増森神社。明治になると村社になる。江戸時代の鎮守にあたる。

※辨天社は、真正寺の東隣にあった。

※真正寺は、現在の増森新田センターにあった。

※第六天は、増森の松井家の北にある道路を越えたあたりにあった。

※清学院は、増森の松井家にあった。「松井大学」として学問を教えていた。

※観音寺は、宝正院の北東にある。

※稻荷社は、現在の宝正院境内、観音寺の境内、真正寺の東側（現在もあり）、清学院の敷地内にあった。

東正寺 新義真言宗、下総国清水村金乗院末、清滝山不動院と号す、本尊胎蔵界大日を安ず（安置する）、坐像にて長一尺余、運慶の作と云、天文二十一年（一五五二）の起立にして、開山賢永

天正四年（一五七六）八月四日遷化せり、鐘楼 鐘は近年の鑄造なり、不動堂 天神社、

清滝社 ○観音寺 同宗同末、歴却山と号す、大永三年（一五二三）尊賢と云僧の起立、本尊

阿弥陀を安ず、観音堂 ○金蔵院 東正寺門徒、下二ヶ寺同じ、元和元年（一六一五）僧良識

の草創なり、本尊十一面観音は良弁の作と云、立像にて長一尺三寸余、不動堂 ○真正寺同

（東正寺）門徒、慈光山と号す、寛永六年（一六二九）僧尊海の起立、本尊十一面観音を安ぜり、

○真光寺 寛永七年（一六三〇）僧賢明の草創なり、本尊阿弥陀、○清学院 本山派修験、

葛飾郡幸手不動院配下なり、本尊不動、○慈光庵 薬師を安ず、真口正寺（真正寺）持、

○東光庵 こゝも薬師を安ず、東正寺持、

※金乗院は、野田市の清水公園のそばにある寺院、清水公園は昔は金乗院の寺領であった。

※金蔵院の本尊十一面観音像は薬師堂（増森公民館）にある十一面観音像と思われる。小島松之助（昭和2年生まれ・屋号「惣右エ門」）の先祖が隠居したところで、「慈光庵」とかつて呼ばれた。

※真正寺は、現在の増森 新田センターの地にあった。

※真光寺は、森西川自治会館の南側の墓地あたりにあった。

※清学院は、増森の松井家にあつた。先祖が大坂から笈に入れた不動明王像を背負つてこの地にやつてきたとの言い伝えが残る。

○中島村 中島村は江戸より行程六里半、民戸三十余、東北は古利根川を越て葛飾郡吉川村、西は本郡増森村、南は元荒川を隔て南百・見田方・東方の三村なり、東西六町余、南北五町、元は隣村増森村より分れし由、既に正保国図此名を載せたれば、分村せしは是より前の事なるべし、されど増森村には此伝なし、分村以来御料所にて今も替らず、用水検地は前村(増森村)と同じ、又増森・増林二村の内に少許の飛地あり、

小名 稻荷免耕地

元荒川 南の方を流る、幅二十五間、○古利根川 東北を流る、幅四十間ばかり、前の元荒川村内にて此川に落合り、こゝに渡場あり、江戸より下総への往来にて、当村の境より葛飾郡平沼に達せり、

※古利根川(現在は、中川と呼んでいる)の渡場とは、中島と吉川を結ぶ「中島の渡し」を指すと思われる。

稻荷社 村の鎮守 ○諏訪社 これも鎮守なり、共に正福寺の持、

正福寺 新義真言宗、下総国葛飾郡清水村金乗院末、稻荷山と号す、本尊大日を安す、

※稻荷社と諏訪社は、現在の中島神社をさす。

※正福寺は、中島神社の裏の中島自治会館にあつた。

○増林村 増林村は民戸二百四十、東西二十町、南北十三町、南は小林村、東は増森村、西は葛西用水堀を隔てて大吉村、北は古利根川を越て葛飾郡上下赤岩村なり、用水は松伏溜井より引沃げり、御打入より今に御料所にして、検地江戸への行程等は前村(中島村)と同じ、其余後年開発の地は、享保十六年(一七三一)柴村藤右衛門・伊藤市兵衛、寛延三年(一七五〇)塩谷八太夫・岩松直右衛門、延享三年(一七四六)舟橋安右衛門、宝暦五年(一七五五)小野佐太夫、明和七年(一七七〇)遠藤兵右衛門等検地して、貢税を定めしむ、

高札場 東の方にあり

古利根川 東の方を流る、これ当郡(埼玉郡)と葛飾郡との界にて、此川に葛飾郡松伏・二郷半・東葛西・上の割・下の割・西葛西・幸手領・半高・足立郡淵江・谷古田・及郷中・八条・新方、都合八ヶ村半組合の溜井あり、是を松伏溜井と云、当村と大吉村境にて、一流を分てり、これ則前の八条・谷古田・淵江・西葛西四ヶ領の用水にて、是を西葛西水路と唱ふ、猶葛飾郡松伏村溜井の条見合すべし、○元荒川 南を流る、幅二十間余、

浅間社 村の鎮守、福寿院の持、末社 山王 ○香取社二字 一は宝蔵院、一は村民の持

○八幡社 梅光院持 末社 稻荷 ○稻荷社 (梅光院)持同じ、○天神社 二字 一は大正院持、一は村民の持、○神明社 大正院持

※浅間社は、現在の護郷神社。大正時代以後に村社になる。

※宝蔵院持ちの香取社は、下組農村センターそばにある。明治になって増林村の村社になる。

※村民持ちの香取社は、古利根川沿いに八幡社と並んで八幡社の西隣りにあった。

※八幡社は、上組一区自治会館の東百八十坪先の古利根川沿いにあった。

※梅光院は、新方川に架かる宮野橋の上流百三十坪の左岸側にあった。

※稻荷社は、現在の城之上橋の南方にある城の上の神社である。「○稻荷社 持同じ、」となっていて、どこの寺院（梅光院）の持ち分か抜けている。「○稻荷社 梅光院持同じ」である。

※天神社は、中山中自治会館そばにある。

※大正院は、中山中自治会館の東側にあった。

※神明社は、ふれあい橋の南西にある。

林泉寺 浄土宗、江戸芝増上寺末、正林山と号す、開山本誓文正元年（一四六六）三月示寂す、

本尊は三尊の弥陀、此腹籠に恵心僧都の作れる弥陀を収むと云、鐘楼 享保三年（一七一八）

鑄造の鐘を掛 観音堂 正観音及子安観音の二体を安ず、○勝林寺 禅宗曹洞派、下新井村

福厳寺の末 法恩山と号せり、開山黙堂闇契は天文七年（一五三八）四月寂す、十一面観音を

本尊となせり、鐘楼 近き鑄造の鐘なり、観音堂 ○福寿院 新義真言宗、瓦曾根村照蓮院末

富井山と号す 本尊は正観音を安ぜり（安置する） 開山長清寛文三年（一六六三）正月廿九日

遷化す、○宝蔵院 同宗、下総国葛飾郡清水村金乘院末、本尊不動を安ず、開山祐範延宝四

年（一六七六）十一月二日寂せり、○法立寺 日蓮宗、下総国平賀村本土寺末、妙富山と号

す、開山日明正保元年（一六四四）十二月十日示寂、本尊三宝（三宝尊）、三十番神堂 ○清伝

寺 林泉寺末なり、真城山と号す、開山証誓寛永十年（一六三三）十月十七日寂す、本尊弥陀

を安ぜり、○浄泉院 同（林泉寺）末、本尊も同じ（弥陀）、○清了院 勝林寺の末、本尊観音

を安ず、○梅光院 本山派修験、葛飾郡幸手不動院の配下、香正山と号す、本尊不動、

○大正院 同（幸手不動院）配下、増林山と号す、本尊も前（不動）に同じ、○薬師堂

○虚空蔵堂 ともに福寿院の持

※林泉寺は、林泉寺発行「林泉寺史」59頁によると、鎌倉時代の永仁五年（一二九七）の「平僧寺」から始まる（開創）。その後、「西堂寺」、「上人寺」と変遷し、現在の「林泉寺」の名称に

落ち着く。またこの新編武蔵風土記稿によると、増上寺の末寺である林泉寺の開山僧は、本誓

上人で、室町時代の文正元年（一四六六）三月に遷化したとされている。本誓上人は「林泉寺史」

3頁によると、正式には誓蓮社本誓上人心阿正林良諦和尚で「心阿正林良諦」の「正林」は

林泉寺の山号に由来していると思われる。なお文誓上人は文正元年とされるが異説もある。

※腹籠とは、仏像などの胎内に観音像や経典などを納めてあること。また、そのもの。

※林泉寺の観音堂には正観音と子安観音を安置するが、「林泉寺史」（編纂者は林泉寺の木村恵俊

氏）の98頁の江戸中期頃の古地図によると、かつては「正観音堂」と「子安観音堂」とが、この頃まで隣り合わせにあったことがわかる。

※勝林寺は、平安時代の万寿二年（一〇二五）二月十日に源勝和尚による「自耕院」（慈恩寺末寺、天台宗）から始まる（開山）という。本尊は正観音。その後、天文元年（一五三二）八月に黙堂闇契（もくどうあんけい）によって曹洞宗に改宗されて中興開山された。本尊は十一面観音。なおその前年には、岩槻にある福厳寺（ふくごんじ）を開山したという。黙堂闇契は天文七年（一五三八）四月十二日の酉の刻（午後六時頃）に示寂している。（以上、山本泰秀氏からの聞き取り）

※福厳寺は岩槻にあって、開山は勝林寺と同じ黙堂闇契。

※勝林寺の観音堂は、山門入って右側にあったが、嘉永六年（一八五三）に焼失し、今はない。

※福寿院は、現在の護郷神社の道路反対側の奥に今でも墓地が残っている。この地が福寿院跡地である。地元の聞き取り調査によると、福寿院には、福寿院持ちの薬師堂がこことは別の地にあったという。

また、福寿院の山号「富井山」は、この寺院の開基をした人の名前から名付けられたとの一部で言伝えがある。墓地そばに富井寿作の小さな畑があったためである。山号に個人名を付けるのは不自然であり、増林村内の江戸時代の石仏石塔には「富井」の名前は見当たらないが、今後の課題として記録に残すことにした。

※宝蔵院は、現在の下組農村センターの東南90°の先にあった。金乗院については中島村の正福寺の項を参照のこと。

※法立寺は珍しく日蓮宗の寺院で、かつては宝蔵院の南150°の所にあったという。

※清伝寺は、現在の鷹匠橋の北東120°の先にあった。

※浄泉院は、林泉寺の境内にある。

※清了院は、現在の定使野橋を松伏に向かって渡った先の猿島道の東側にあった。墓地は離れた東北東に現在も残っている。

※梅光院は、現在の定使野橋の下流の新方川の左岸にあった。

※大正院は、中山中自治会館の近くにあった。

※虚空蔵堂は、下組農村センターの南西、東京平方線の道路北側にあった。

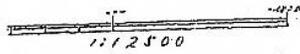
増林地区寺社分布略図 (江戸期)

埼玉縣 南埼玉郡

増林村畧図

製作 2000年4月

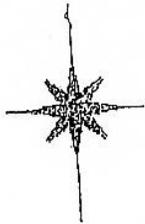
山本泰秀



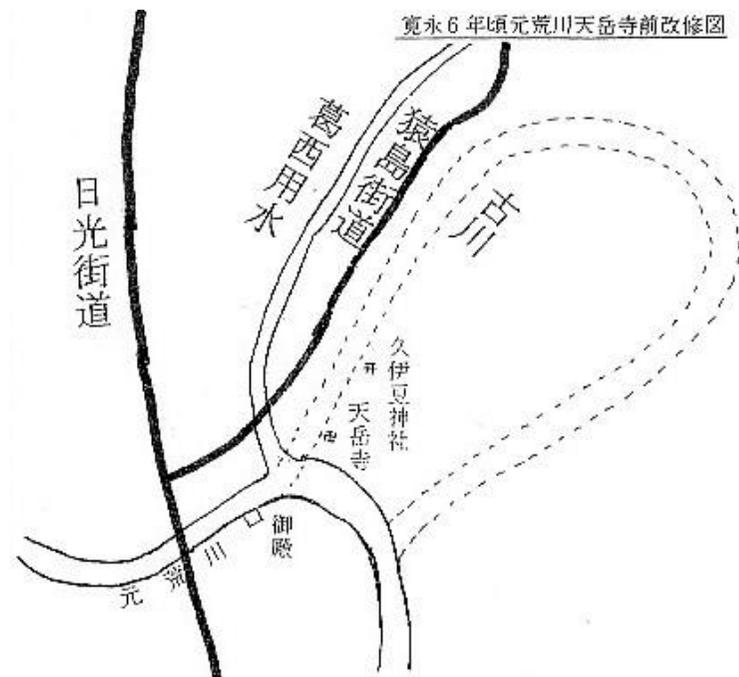
●	○	×	△	□	◇	▽	■	▲	◆	◇	▽	■	▲	◆	◇	▽	■	▲	◆
東福寺	蓮乗院	香取社	観音寺	東光院	東福寺	観音寺	香取社	密藏院	香取社	八幡社	眞光寺								



山本泰秀氏が聞き取り調査によって2000年4月に作成して完成したのが「増林地区寺社分布略図」である。この貴重な資料をもとに、寺社名の文字を鮮明にし、増林の勝林寺周辺や小林の東福寺周辺の寺社の配置、増森の雷電社、第六天など一部に手を加えた。2022年4月 加藤幸一
 花田地区のみ明治13年測量の迅速測図を使用して寺社の記号と名称の文字をわかりやすく書き換えた。2024年3月 加藤



花田の周りを流れた元荒川



「天狗の鼻」のように
迂回して流れた

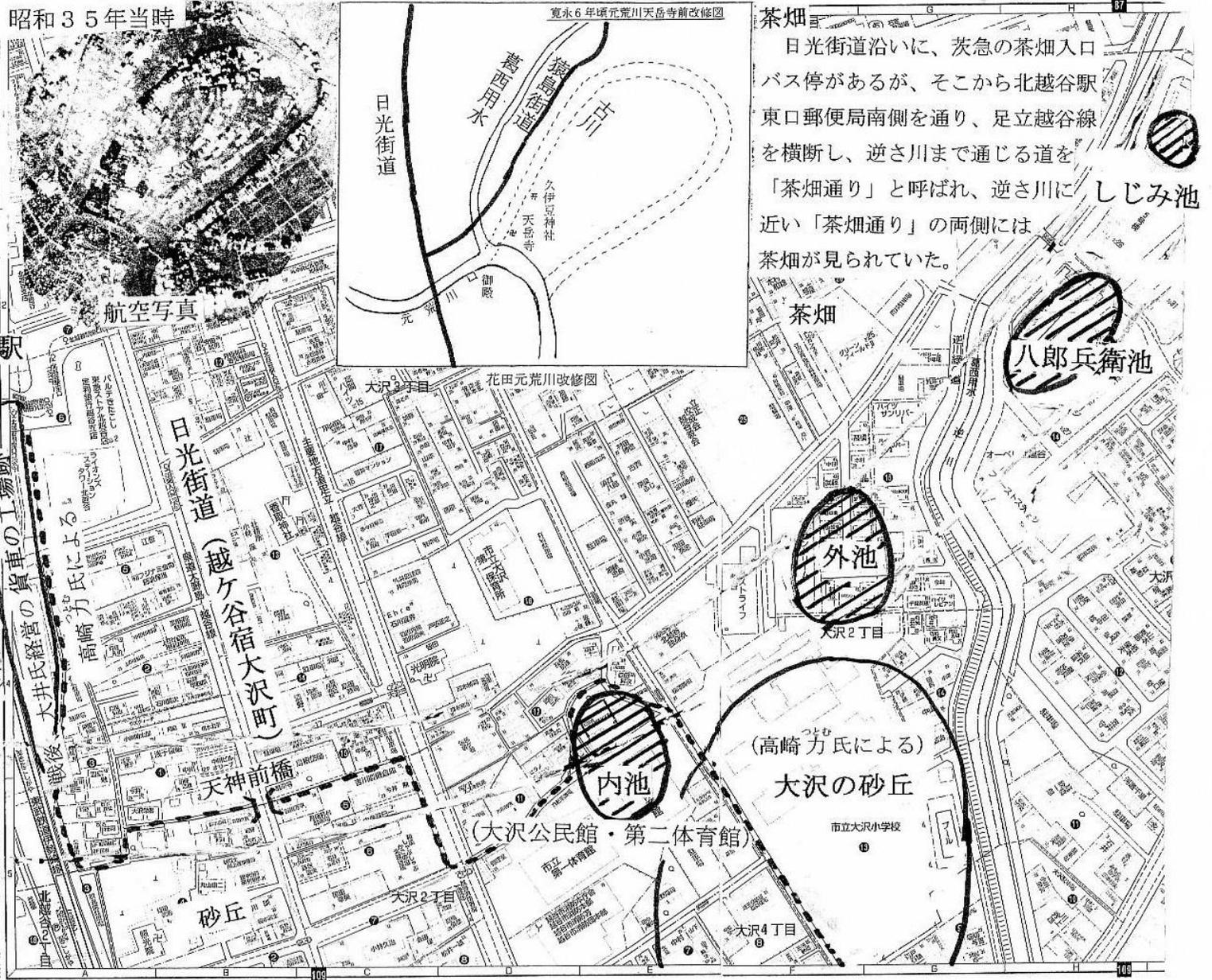
加藤幸一が平成23年4月用の史跡めぐりの為に作成した資料1頁から7頁を抜粋し、一部改訂して作成

平成23年4月30日（土）

第414回 史跡めぐり（市内半日）

「元荒川の流れたあとをたどり、スナツカラ地蔵へ」

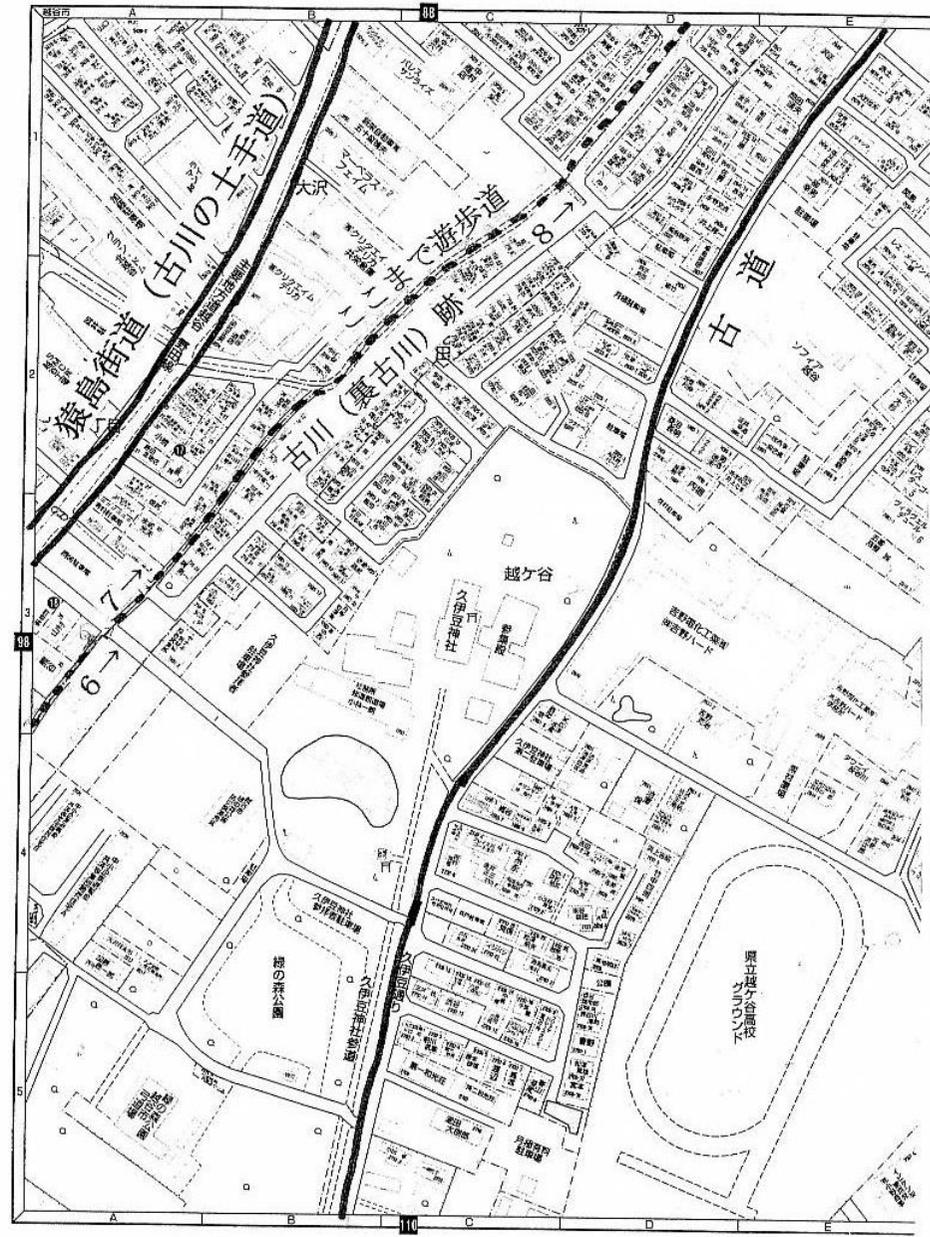
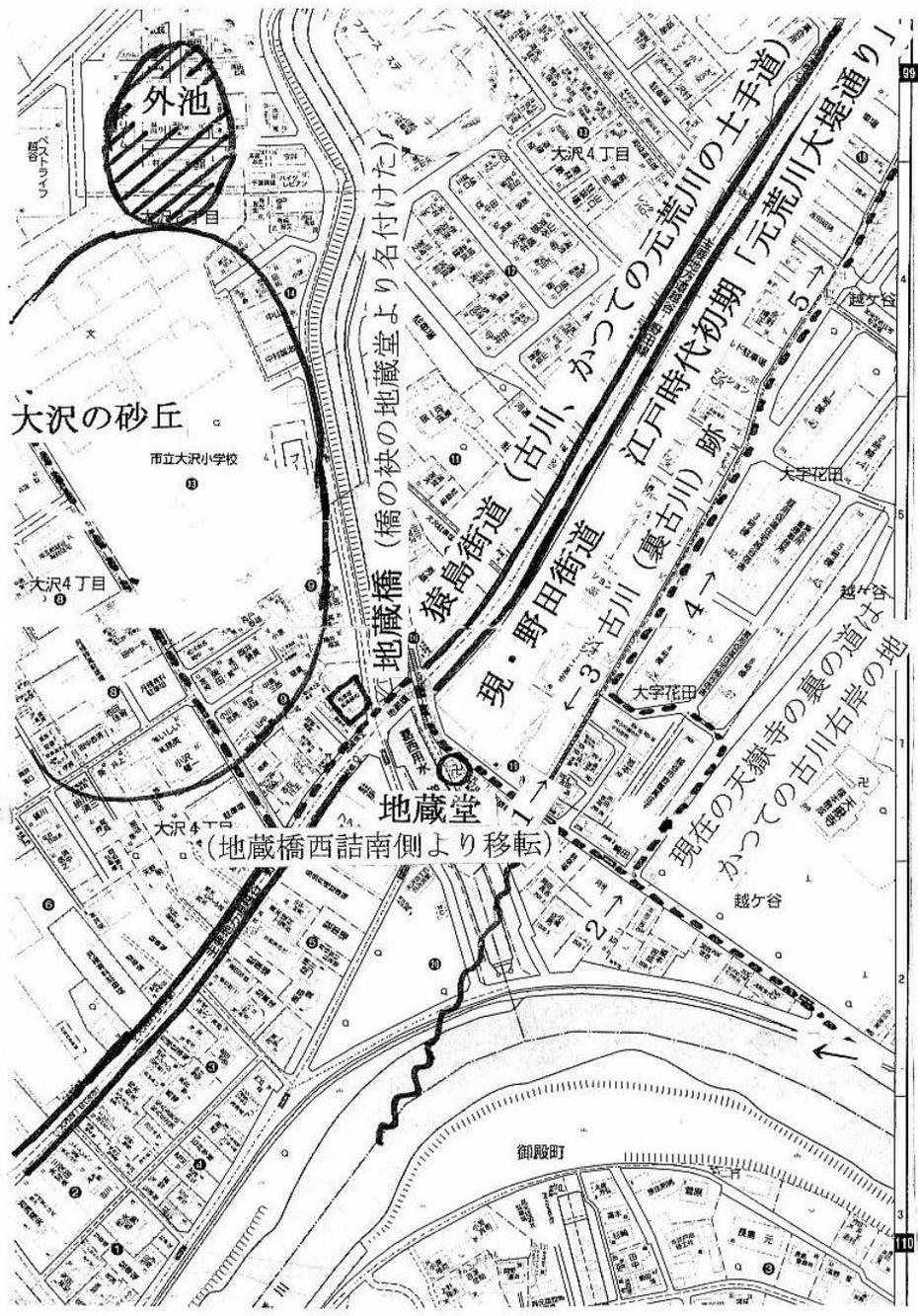
北越谷駅（明治32年に越ヶ谷停車場、大正8年から武州大沢駅、昭和31年から北越谷駅）



元荒川が花田村の周りを天狗の鼻のように廻って流れていた。
それが江戸時代初期に、元荒川の直道改修によって、今日のようになった。
このかつての元荒川の流路をたどる。

元荒川の直道改修の時期

越ヶ谷天嶽寺前の直道改修の時期は、荒川の熊谷の久下
先の瀬替えや中島用水（現、鷲後用水・逆さ川）の開発
と同一時期の寛永六年（一六二九）と推定されている。



※数字は、写真の番号

※ は古川の見学コース



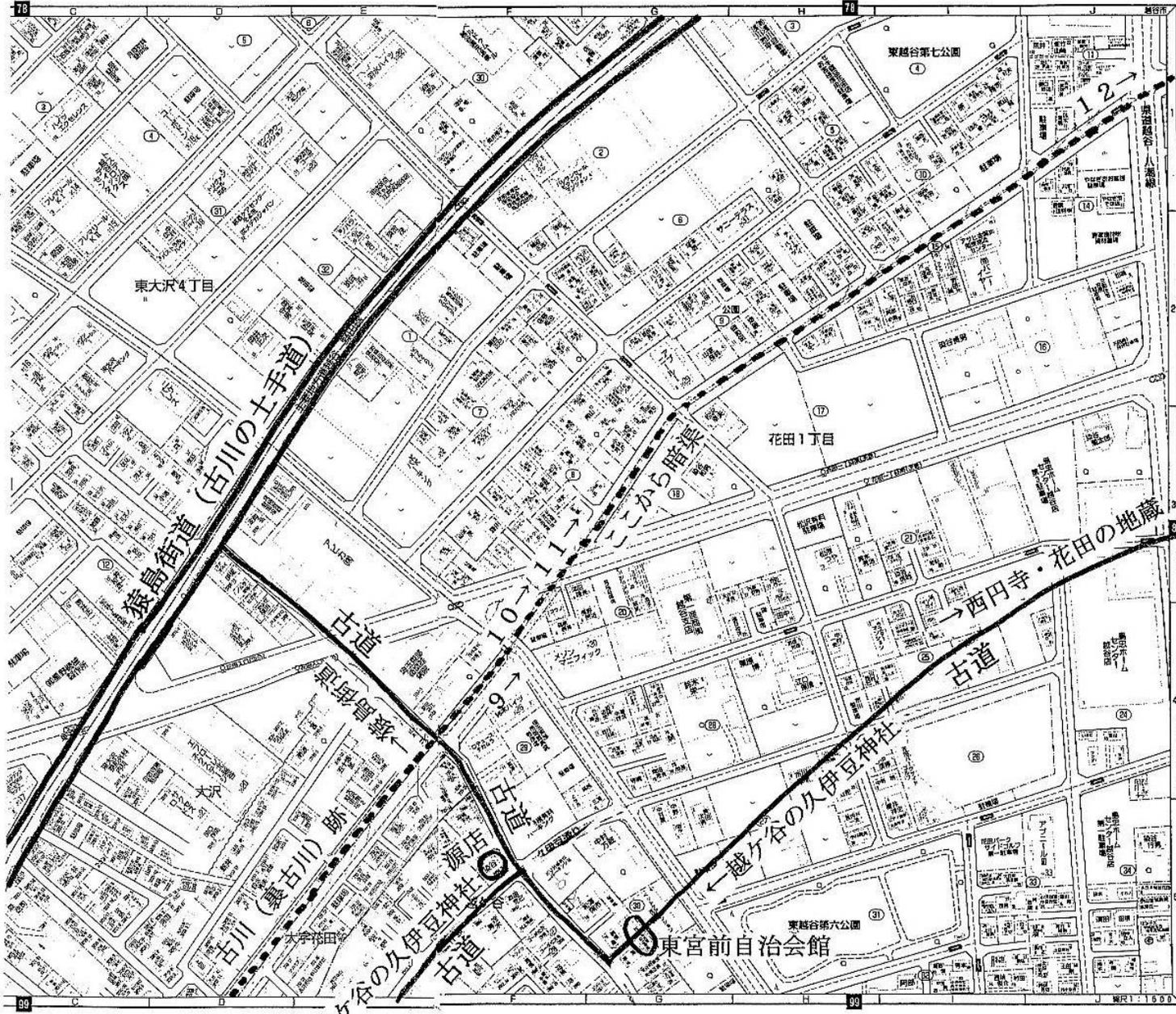
花田の地名の由来・・・花田村の花田の地名の由来について、文化文政年間発行の

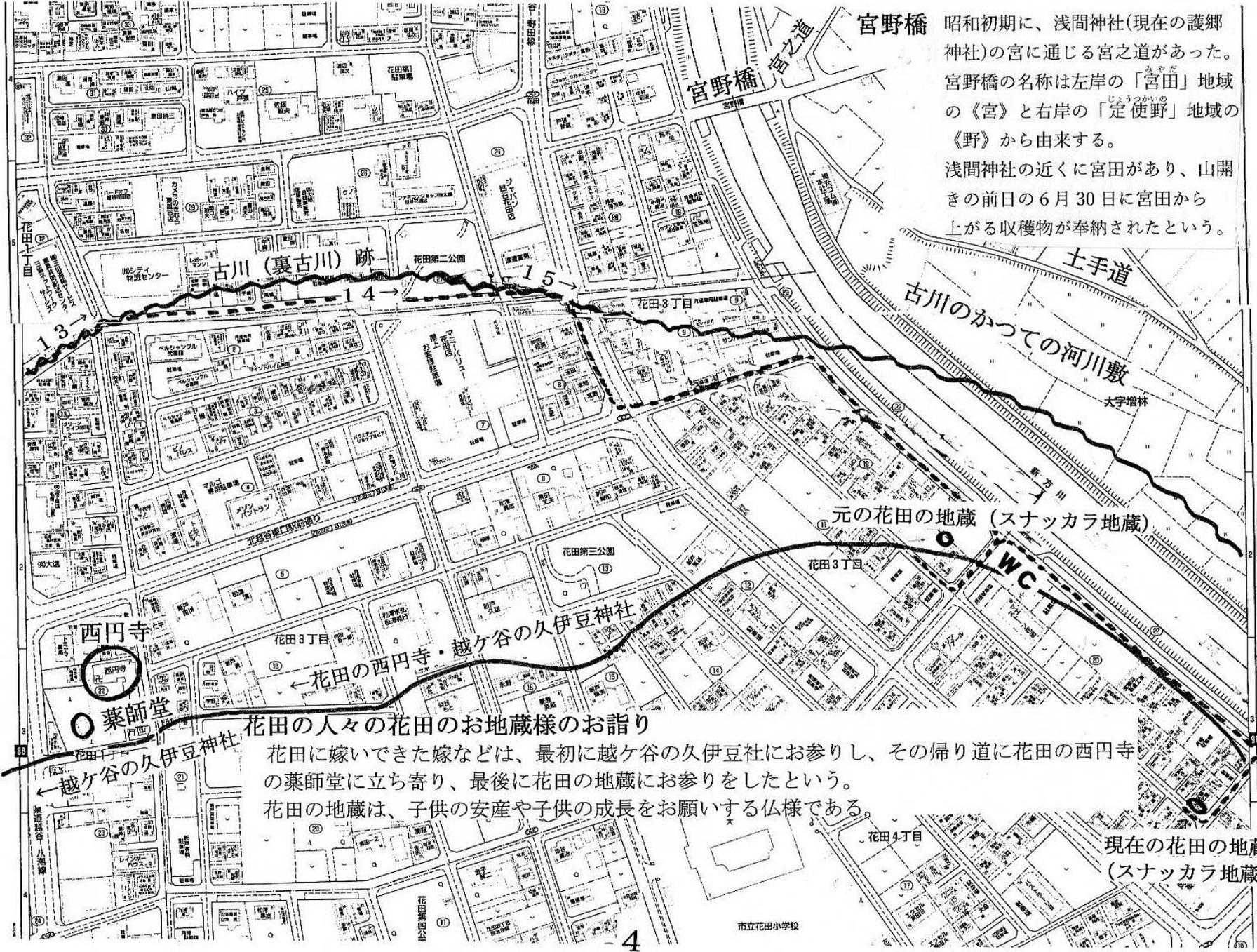
「越ヶ谷瓜の蔓」(福井猷貞著)によると、

『花田は元荒川押廻(おしまわ)り、天狗の鼻の先の如き組ゆへ、鼻田と称するを花田と書替(かきかえ)』

と記載されている。

花田の地名の由来は、花田の周りが元荒川の流れによって天狗の鼻のようであることからきているとしている。

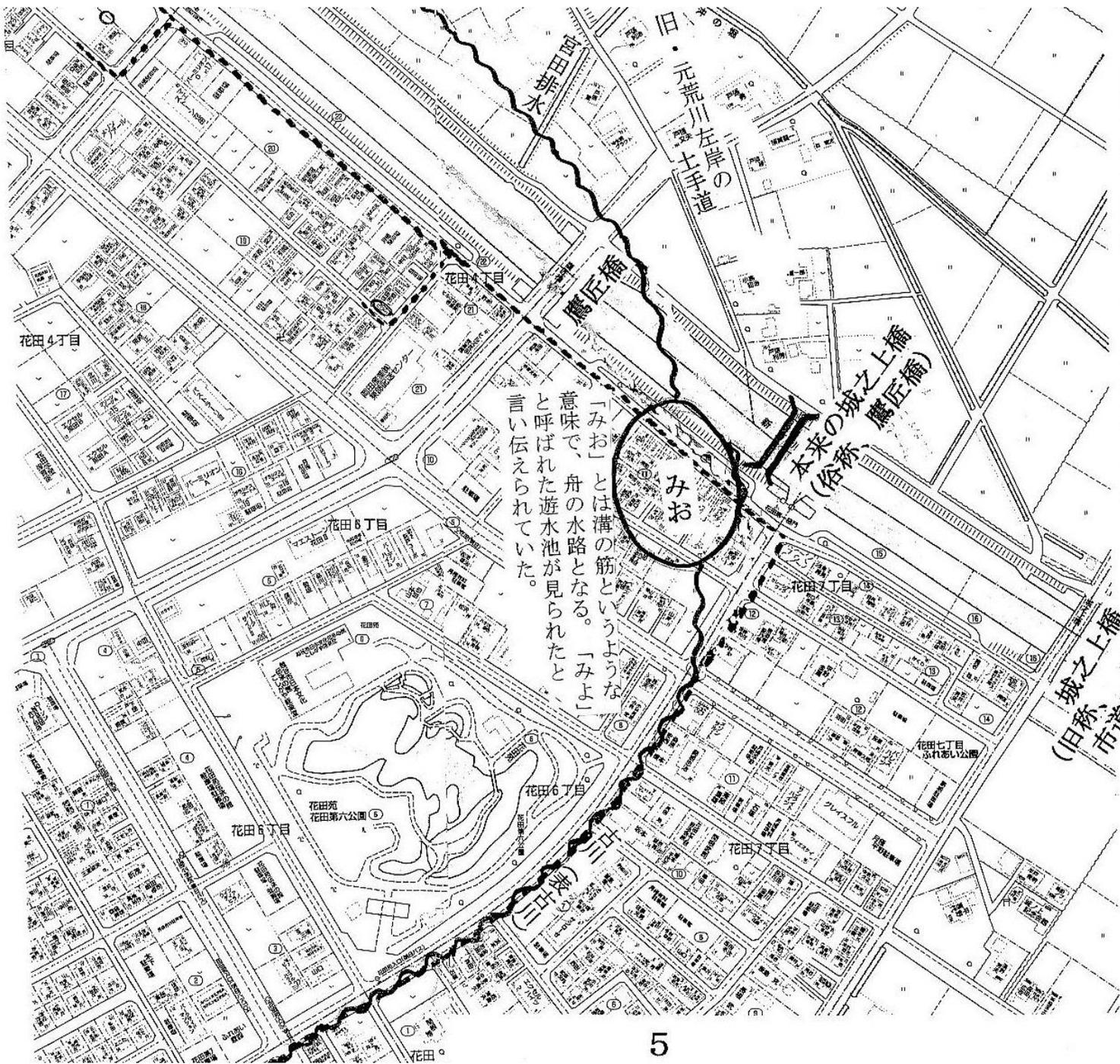




宮野橋 昭和初期に、浅間神社(現在の護郷神社)の宮に通じる宮之道があった。宮野橋の名称は左岸の「宮田」地域の《宮》と右岸の「定使野」地域の《野》から由来する。浅間神社の近くに宮田があり、山開きの前日の6月30日に宮田から上がる収穫物が奉納されたという。

花田の人々の花田のお地蔵様のお詣り
 花田に嫁いできた嫁などは、最初に越ヶ谷の久伊豆社にお参りし、その帰り道に花田の西円寺の薬師堂に立ち寄り、最後に花田の地蔵にお参りをしたという。花田の地蔵は、子供の安産や子供の成長をお願いする仏様である。

現在の花田の地蔵 (スナッカラ地蔵)



現、鷹匠（たかじょう）橋

昭和5年に初めてここに架けられた橋。下流にあった鷹匠橋の名を採用した。鴨場の鷹匠が増林での鷹の訓練のために、よくこの橋を渡っていた。

本来の城之上橋

花田第一樋門の北隣あたりに大人一人分が渡れる程の土橋であった。

明治41年にできた大林の鴨場の鷹匠が鷹の訓練を増林でするために、よくこの橋を渡っていたので、俗称、鷹匠橋とも呼ばれた。

現、城之上橋

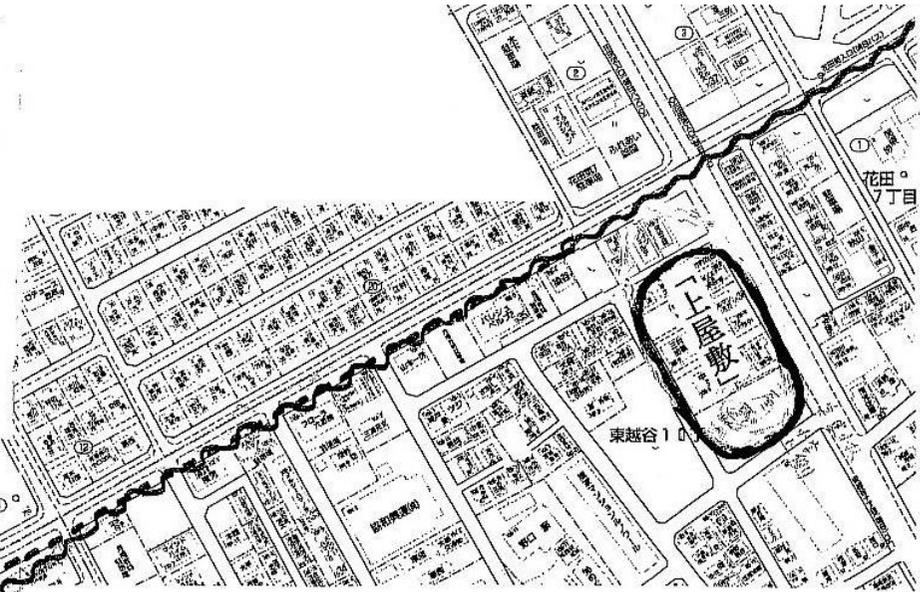
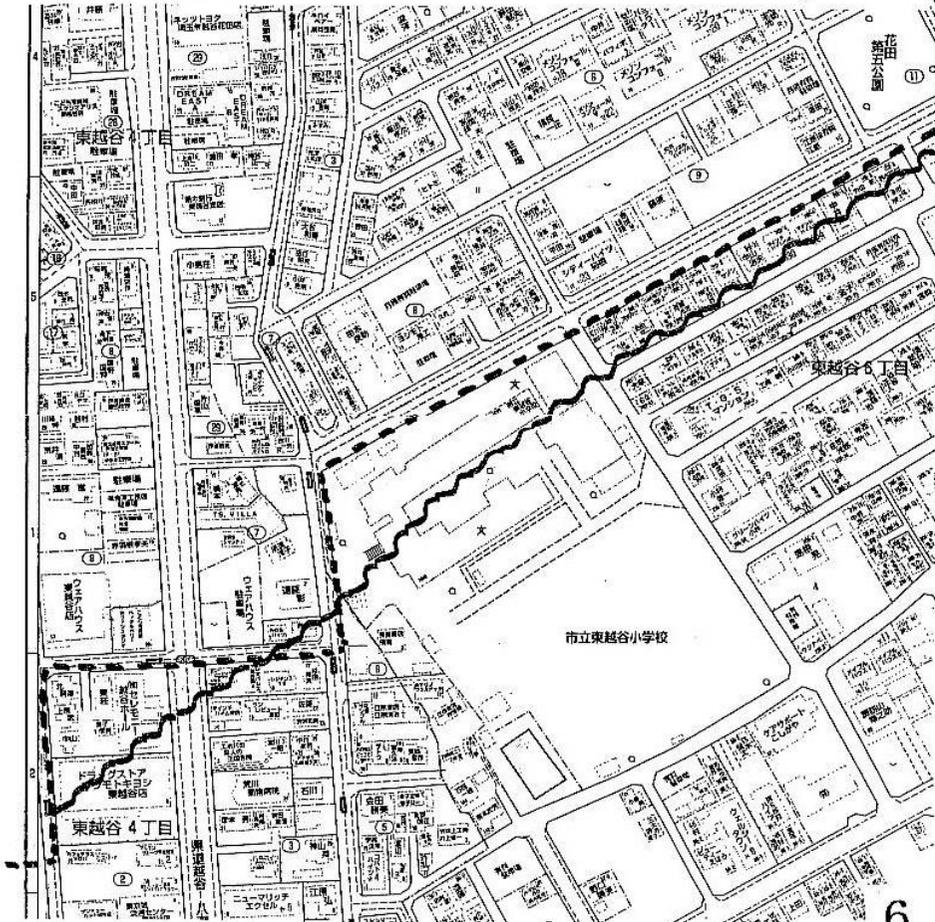
もとは市道（いちみち）橋と呼ばれていたが、昭和初期の架け替えの時に、上流にかつてあった城之上橋の名を採用して、城之上橋と改名した。

「みお」とは溝の筋というような意味で、舟の水路となる。「みよ」と呼ばれた遊水池が見られたと言い伝えられていた。

【上屋敷】

旧・小林村上側（かみかわ）に「上屋敷」と昔から呼ばれてきた謎の地がある。増林村城之上と小林村上側との境界付近の小林村側、現、東越谷10-108である。

野口豪氏《現、東越谷、旧・小林村上側》によると、小字の上側は上屋敷の側（そば）という意味ではないかと考え、小林村側ではあるが、江戸時代初期に城之上にあったとされる由緒ある「お茶屋御殿」と関係した後世の建物であったらと推定している。



【花田の地蔵、「スナツカラの地蔵」の由来】

江戸時代から地元やその周辺で親しまれてきた「花田のお地蔵様」は、すぐそばの地元では「スナツカラ」と呼ばれた元荒川の河川敷のそばにあったので「スナツカラのお地蔵様」とも呼ばれた。周辺ではなまって「スマツカラの地蔵」と呼ばれていた。

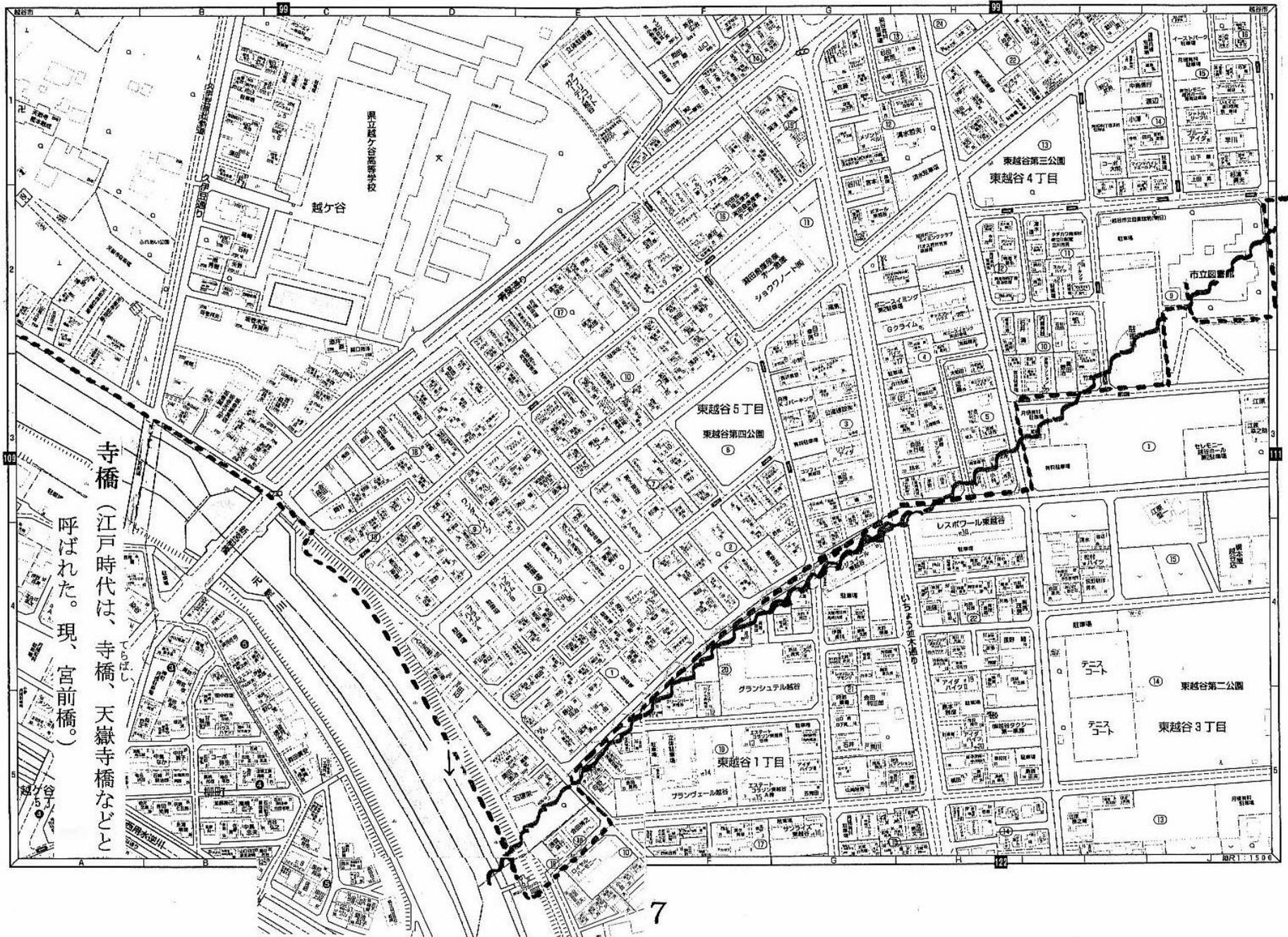
「スナツカラ」とは、砂河原のことで、当時の「花田のお地蔵様」あたりから現在の鷹匠橋までの間の古川（昔の元荒川筋）の河原跡にみられる耕地をさした。

【花田の地蔵伝説】

昔、元荒川が花田の方に花田の地を囲むように迂回して流れていた頃の話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこのお地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし堤の上に入れてお祀りしたという。

【花田の地蔵のルーツ】

葛飾区の水元公園そばの正徳寺（現、南蔵院）がルーツである。江戸時代初期に、ここから古利根川と元荒川・古川を利用して運ばれてきたのである。詳細は、教育委員会発行の「川のあるまち」第29号を参照のこと。



寺橋 (江戸時代は、寺橋、天嶽寺橋などと
呼ばれた。現、宮前橋。)

花田のお地蔵さま（スナツカラ地蔵）

— はなた 花田の地蔵を通して知る越谷市花田と

— みずもと 葛飾区水元との交流 —

加藤幸一

今から四百年前の江戸初期、越谷市花田と、遠く離れた葛飾区水元との間で、人的交流が見られていたことが「花田の地蔵」（「スナツカラ地蔵」）の調査を通して判明した。

【花田の地蔵、「スナツカラ地蔵」の由来】

江戸時代から、地元やその周辺で親しまれてきた「花田のお地蔵様」は、すぐ近くの人々の間では、スナツカラの地のそばにあったので「スナツカラのお地蔵様」と呼ばれることもあり、花田の区画整理事業が行われ始めた昭和五十一年（一九七六）頃より、「スナツカラ」ではなく、なまった呼称の方の「スマツカラ地蔵」として紹介されるようになる。

「スナツカラ」とは、砂河原のことで、当時の「花田のお地蔵様」あたりから現在の鷹匠（たかじょう）橋までの間の古川（昔の元荒川筋）の河原跡にみられる耕地をさした。

なお、対岸の増林（ましばやし）村の人々は、この「花田の地蔵」を「見晴らし地蔵」とも呼んでいた。この地蔵が他所よりも最も高い所（昔の元荒川の自然堤防上）に立って目立っていて、周囲を見はらしているかのようだからである。

【花田の地蔵伝説】

昔、元荒川が花田の方に花田の地を囲むように迂回して流れていた頃の話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、

急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこのお地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし堤の上に向けてお祀りしたという。

一方、「お地蔵さまの首の骨が折れて舟が動かなくなった」とか、「お地蔵さまがここに流れ着いた」という話も一部で残っている。「地蔵の首が折れたから」との話は、地蔵を初めてこの地に安置する時から首が既に折れていたとは考えにくいので、本来の言い伝えではないであろう。なお、花田の地蔵伝説については、詳細な話もある。その内容は次の通りである。

地蔵の石仏を載せた大型の船が、海の幸で財をなした人が、秩父の札所に送り届けたいとの希望で、海から元荒川を上ってここまで来た。さらに上流に行くために、ここでとどまり、元荒川の滞（みお）で川の水が増えるのを待っていた。増水するやいなや、一気に上流へと川を上ろうとしたが、強風にあおられて船が河原に乗り上げてしまった。そこでこの地蔵はここにとどまりたいのであろうと思ひ、見晴らしのよいこの地に安置された。

以上の話が、古川の対岸（新方川の左岸）にある控え土手（増林への水害を防ぐために設けられた土手道）のそばに住む増林の小島初治（はつはる）氏による先輩たちから以前聞いた話である。「みお」とは、ここでは川の中で深い所という意味で、遊水池のようであったという。現在の鷹匠橋の南東、花田第一樋門の西側あたりである。

地蔵が下流から運ばれてきたことから、海の方から運ばれてきたとの内容になったのであろう。それに今から三百五十年前からの口伝えであるから、当然、内容の変遷があり、そのまま鵜呑みにはできない。

「川を上ってきてここで安置された」としての言い伝えが自然であり、後世の付け加えがあったものと思われるが、興味を引く内容ではある。

【「花田の地蔵」のルーツ】

常磐線金町駅から北に向かって歩くと、水元の地に着く。水元には、戦前の教科書にも載った大岡さばきで有名な「しばられ地蔵」のある

南蔵院という寺院がある。荒縄で地蔵尊をしばりつける信仰が江戸時代から今日まで続いている。地元やその周辺は勿論、遠く離れた地域まで知られている。

実は、水元近くの金町を本店とする、「しばられ地蔵尊」という名からとった菓子店の支店が、越谷の地にも偶然にあり、蒲生の日光街道沿い（現、南越谷一丁目）に置かれ、外装にしばられ地蔵尊の絵が描かれた「しばられ地蔵の満願ごらやき」が販売されている。

偶然といえば「正徳寺（しょうとくじ）」と刻まれている花田の地蔵がこの水元の地の正徳寺からやってきた」、つまり「花田の地蔵のルーツが正徳寺（現、南蔵院）である」と秦野秀明氏の調査協力により判明した頃、私の娘がすぐそばの中学校で英語の教鞭をとっていたのには驚いた。

江戸時代の南蔵院は、大正十二年の関東大震災で被害に遭ったのがきっかけで、昭和四年十月に、日本所区中之郷（現、墨田区吾妻橋三丁目）の地からこの水元の地の聖徳寺に移転してきた。以来、江戸時代の聖徳寺の石塔等を大切に保存してきたために、今日までしっかりと残っているのである。

花田の地蔵尊と関連した地蔵は、この南蔵院の「しばられ地蔵」ではなく、江戸初期の正徳寺の時にこの地で造立された承応三年（一六五四）の地蔵の石仏である。これが、花田の地蔵とほぼ同時期にできたという点で、花田の地蔵と兄弟分といえよう。

【「花田の地蔵」と同時期の地蔵菩薩像】

花田の地蔵には「正徳寺」と刻まれていることから（「花田の地蔵」の図参照）、江戸時代の初め頃の聖徳寺は、正徳寺と書かれていたようである。聖徳太子の聖徳と発音が同じなので、寺の名前も聖徳寺と書かれるようになったと思われる。現在でも、南蔵院には再建された太子堂があつて、聖徳寺から受け継がれた太子信仰が続いていることは微笑ましい。

この南蔵院の墓地の西端には、明治十五年（一八八二）一月十七日

に亡くなった聖徳寺の住職「教光院慈探大和尚」の記念碑がある。

地元の多くの人によって明治四十一年（一九〇八）二月十七日に造立している。その向かつて左隣に、「聖徳寺」と刻まれた享保三年（一七一八）閏十月造立の地蔵菩薩の石仏（舟型）がある。向かつて右隣には、花田の地蔵（丸彫り）の造立年の承応四年正月二十六日より五力月前に造立された承応三年八月吉日の地蔵の石仏（舟型）があるが、花田の地蔵とほぼ同時期に作られ、これがいわば「花田の地蔵の兄貴分」といえようか。今回取り上げた正徳寺の地蔵菩薩像石仏である。

（「正徳寺の承応三年の地蔵菩薩像」の図参照）

【花田と水元との交流】

花田のお地蔵様の石仏からわかる歴史的事実は、「花田の地蔵」を奉納した施主が、現在の葛飾区の小合溜（小合溜井）そばの正徳寺（聖徳寺）住職であったことから次のように推定できる。

造立された地蔵は、下小合村（現在の水元）を出発し、小合溜から現在の大場川、今はなき古利根川（八潮南公園から宝光寺の北側）、現在の中川（かつての古利根川）、現在の吉川橋で中川（古利根川）と別れて西に向け元荒川に入り、そのまま進み、現在の宮前橋より二百五十メートル手前からわざわざ東方に迂回（花田を迂回していた当時の元荒川筋、後の古川、現在は全くない）して、この花田の地を指して運ばれたのであろう。

この花田の地蔵は、源海の三十三回忌の為に承応四年（一六五五）に建てられた石仏である。源海が亡くなった年は一六二三年であり、それ以前には源海を介して既に花田と水元との触れ合いはあったと思われる、江戸時代初期の西暦一六〇〇年前後、つまり今から四百年前には既に両村の交流があったのであろう。江戸初期の花田村と下小合村との中川（古利根川）や元荒川を介した下小合村の源海との人的交流と物資の交流が伺えられる。（「花田の地蔵のルーツとその交流ルート」参照）

なお、源海の名は、正徳寺の山号「金海山」の「海」の一字をとって

名付けたものであり、さらに、花田と下小合の仲を取り持つ源海は、花田に縁のある花田出身者ではなかったかとの穿った考えもできる。

【「花田の地蔵」の銘文からわかる行政区分】

現在の水元・金町地域は、江戸時代以前は香取社の見られる下総国に属していた。当時の武蔵国と下総国との境は、八潮市と三郷市の境を流れる中川、足立区南側の区境を流れる古隅田川、それに続く台東区と墨田区の境を流れる隅田川であったと推定されている。

この地域が下総国から武蔵国に編入した時期についてははっきりとわかっていないが、江戸幕府の正保(しょうほう)元年(一六四四)の「正保改定図」によると、江戸川(太田川・ふとひ)以西は、下総国に属していたことが知られている。この「花田の地蔵」に刻まれた文字の解読によって、この石仏が造立された承応四年(一六五五)には、既に武蔵国に編入されたことが裏付けされるばかりか、現在の中川を境に、既に東側が東葛西領(現在の金町・水元地域)、西側が西葛西領(亀有地域)と呼ばれ、東葛西領が上之割(葛飾区)と下之割(江戸川区)とに分割されていたこともわかる点では、貴重な石仏といえよう。

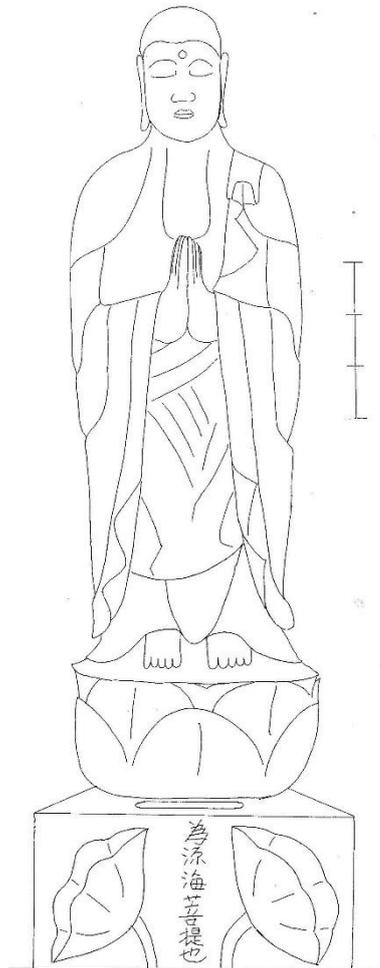
【「花田の地蔵」の昔の位置】

区画整理事業前の花田の地蔵は、古川に沿った自然堤防上の野道の路傍(現在の花田三―一〇あたり)にあり、南西向きに他の石仏と一緒に並んで立っていたのである。移転先は、花田四―二〇―一三の佐藤家南側路傍である。

【越ヶ谷の久伊豆神社、花田の西円寺の薬師堂、花田の地蔵の三ヶ所の参詣】

越ヶ谷の久伊豆社から「せんげん堀」(新方川)に架かる鷹匠橋に通じる村道があった。花田に嫁いできた嫁は、赤ちゃんが生まれた時(男の子は二十一日目、女の子は三十三日目)は、この村道を利用して最初は越ヶ谷の久伊豆(ひさいず)神社にお宮参りをし、その次は花田の西円寺(さいえんじ)の境内の薬師堂、そして最後に花田の地蔵尊に立ち寄ってお参りをしたのである。

花田の人々は、花田のお地蔵さまが昔から子供を守ってくれる仏様として、区画整理事業の開発で他所に移転した今でも、花や線香をお供え、大切にしている。



台石の向かって右側面の文字

武州葛西領

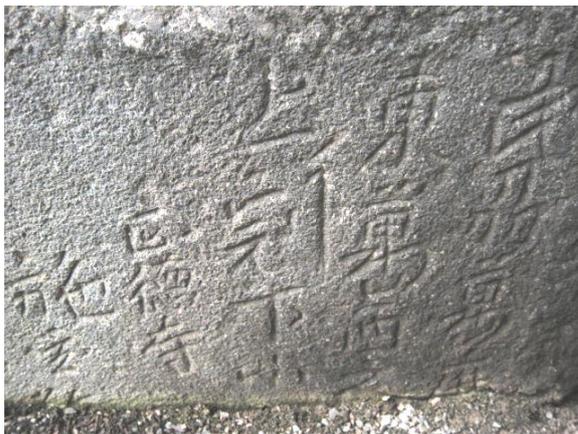
東葛西之庄

上ノ割下小合

村

正徳寺

施主敬白

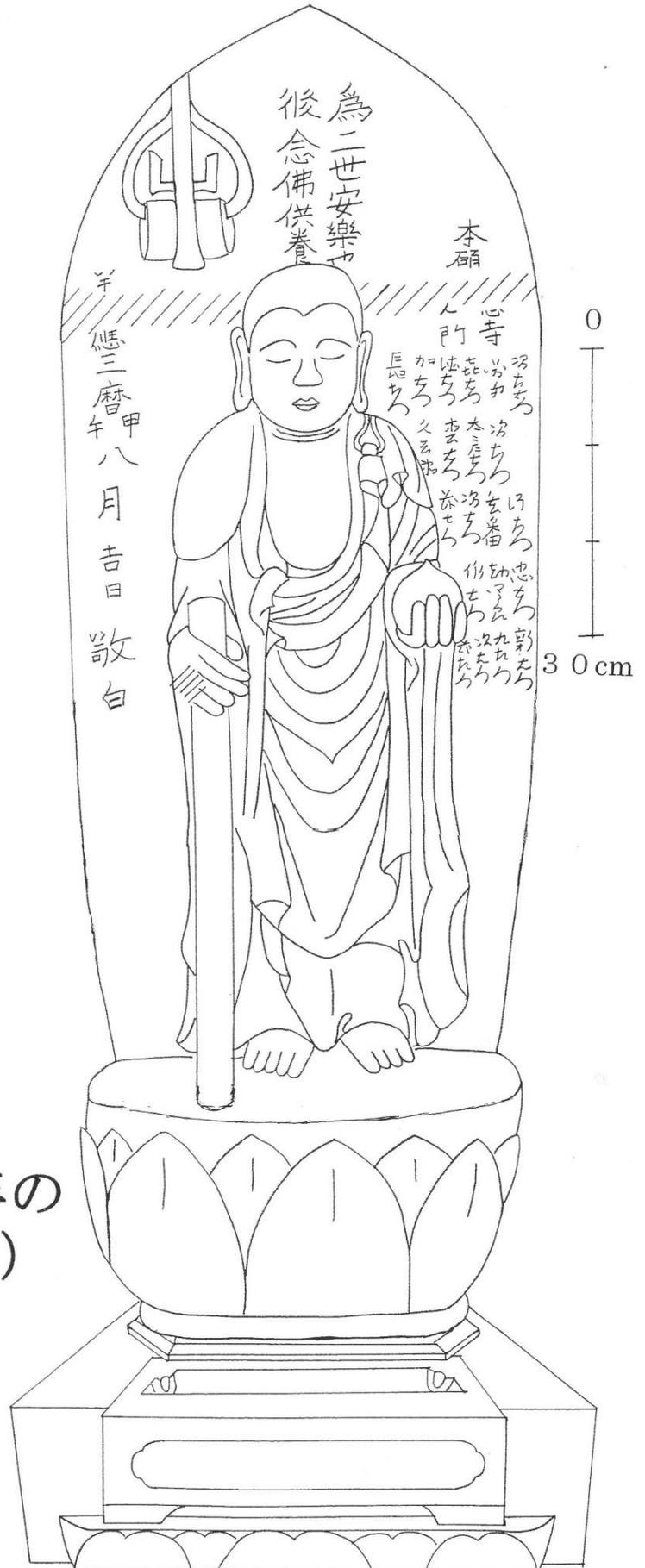


かつての花田の地蔵尊（スナッカラ地蔵）



撮影：秦野秀明氏





為二世安樂也
修念仏供養

(左手宝珠・右手錫杖の地藏菩薩立像)

(承応) 甲
兼應三曆 八月 吉日 敬白
午

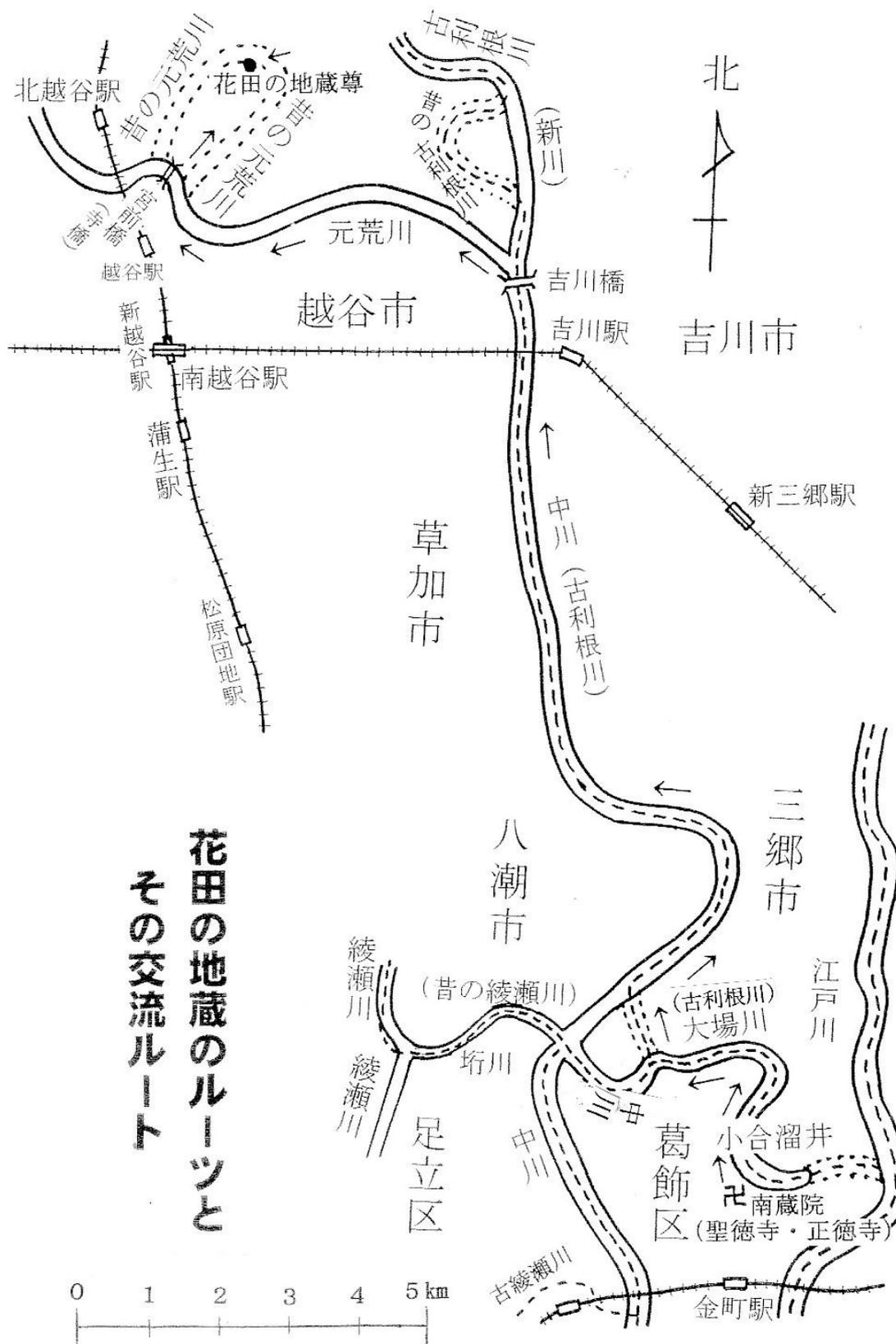
- | | | | | |
|--------|-------|-------|------|------|
| (正徳) | 次左右衛門 | 得左衛門 | 忠右衛門 | 新右衛門 |
| □□□ | □□□ | 次左衛門 | 玄番 | 勘四郎 |
| □□□ | 喜右衛門 | 太郎左衛門 | 次右衛門 | 作右衛門 |
| (祈願所カ) | 徳右衛門 | 奎右衛門 | 茂右衛門 | 次右衛門 |
| □□□ | 加右衛門 | 久兵衛 | 茂左衛門 | |
| | 長右衛門 | | | |

葛飾区の南蔵院にある
花田の兄弟分の地藏尊

正徳寺の承応三年の
(聖徳寺) (1654)

地藏菩薩像

葛飾区東水元の「南蔵院」(しばられ地藏) 墓地



はなた 花田の地蔵尊の新旧所在地



「ゼンリン住宅地図 越谷市」(2006年12月)を元に作成

- 「花田八元荒川押(おし)廻り、天狗の鼻の先の如き組ゆへ、鼻田と称するを花田と書替(かきかう)。」(『越ヶ谷瓜の蔓』より)
- ・花田(はなた)村は、元荒川が[その村の周囲を迂回しながら流れ]廻り、天狗の鼻の先のようにになっている共同体なので、[本来は]「鼻田」と称するのだが、「花田」と書き換えて[今日に至って]いる。
- ・つまり、花田の村名のいわれは、「花の田」ではなく、村の周りに元荒川が流れ、村が天狗の鼻のような形をしていて、田が広がっているからだという。
- ・しかし、花田の「はな」とは、「鼻」という意味ではなく、「端(はな)」という意味に解釈して、「越ヶ谷郷の端(はし)」という意味か？
- ・なお、越谷市役所発行「越谷市史第四巻・史料二」46頁では、「花田八元荒川押迫り」と「迫り」となっているが、「廻り」の誤植である。

越谷八景

「越谷八景」とは、越谷で自慢のできる八箇所の選ばれた景色のことをいう。越谷町の漢詩人、山本梅塘が明治初年に「近江八景」「金沢八景」などにならって設定されたもの。

「越谷八景」の八景は次のとおりである。

一 瓦曾根の帰帆

瓦曾根溜井の松土手で荷揚げが終わって帰ろうとしている空船（積み荷のない船）と周囲の溜井の情景。

なお、「松土手」とは溜井の中程にあった松のみられた中土手で、元荒川の左岸の小林村から石堰まで細長く続いている。松土手はすでに享保年間（一七一六〜一七三六）から河岸場が設けられ、商品荷物や年貢米輸送の積み出し場になっていた。

二 水神の落雁

瓦曾根溜井内の離れ小島（今はない）に祭られた水神の祠と、空から舞い降りる雁の情景。現在、水神様の祠は東越谷二一〇一三の島根家に移されている。

三 東福寺の秋月

元荒川の自然堤防が発達した砂丘上にある東福寺と、その寺の松林にかかる秋の月の情景。

四 久伊豆の暮雪

越ヶ谷町の久伊豆神社とその参道の松並木に降る暮れ方の雪景色。

五 柳原の夜雨

柳原（現在の「柳町」あたり）に生い茂る柳に降る夜の雨の情景。

柳原のそばを流れる元荒川の広い河原一面には葦や真がまが生い茂り、土手側には柳が生い茂っていた。

六 大相模の晴嵐

大相模の不動尊とその周囲に繁っていた大木に晴天の日立ち込める山気の情景。

山気とは、山中に特有の冷え冷えとした爽やかな感じの空気や霧囲気をいう。

七 寺橋の夕照

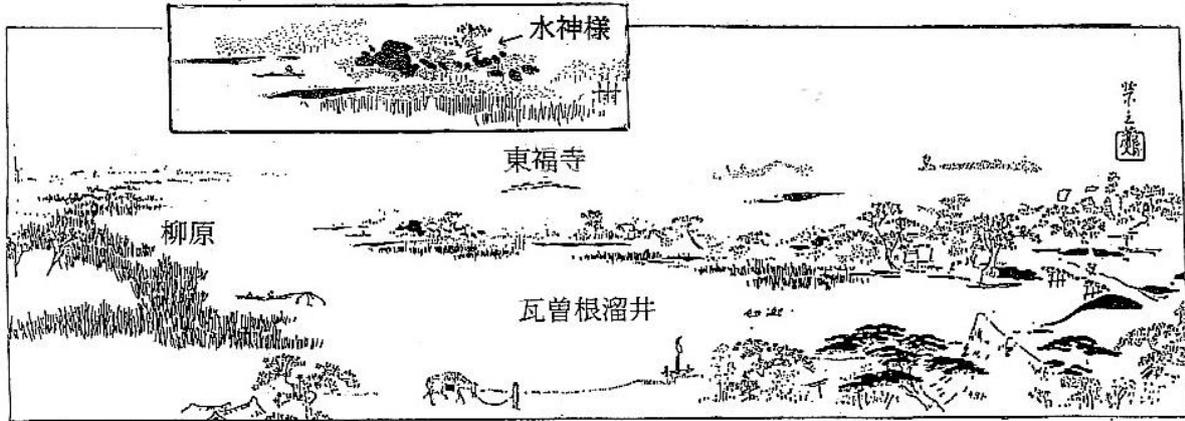
元荒川に架かる寺橋（現在の宮前橋）と両岸にある樹木に囲まれた草葺き屋根の家々が夕焼けで川に映った情景。

なお「寺橋」とは、天嶽寺に通じる橋という意味。今日では、久伊豆神社（お宮）の参道に通じることから宮前橋と呼ぶ。現在は、その宮前橋は取り壊され、それにかわってすぐそばの下流に新宮前橋ができています。

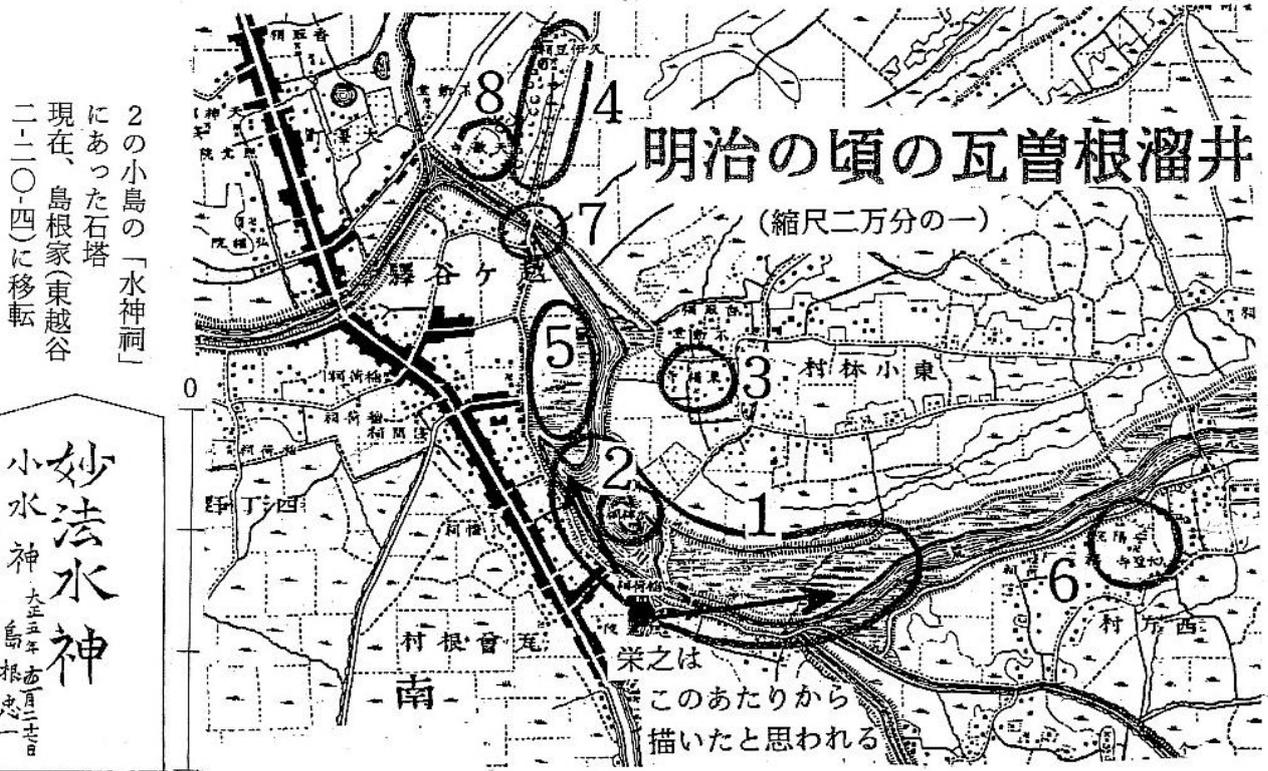
八 天嶽寺の晩鐘

天嶽寺とその寺の暮れ六つ（現在の午後六時頃）の鐘の鳴り渡る周辺の趣とその情景。

鳥文齋細田栄之の
江戸時代の『瓦曾根溜井図』(模写 加藤)



天明・寛政年間(1781~1801)にかけて鳥文齋細田栄之(えいし)が瓦曾根村の名主である中村家(現、瓦曾根1-5-19)に遊びに来た時に描いた水墨画である。中村家の当時の松の木(図では向かって右下中央寄り)の手前上空あたりから見る瓦曾根溜井の風景を鳥瞰図として描いていて、当時の溜井の様子がよくわかる。栄之は喜多川歌麿・鳥居清長と並ぶ当時の三大浮世絵師に数えられる。



2の小島の「水神祠」
にあった石塔
現在、島根家(東越谷
二二〇四)に移転

妙法水神
小水神
大正三年
島根忠一

非公開

30
cm

参謀本部陸軍部地図課と測量課による
「越箇谷驛 迅速測図」(明治二十一年再版)

《越谷八景》

- | | | | |
|------------|-------------|----------|------------|
| 1 瓦曾根溜井の帰帆 | 2 水神様の落雁 | 3 東福寺の秋月 | 4 久伊豆神社の暮雪 |
| 5 柳原の夜雨 | 6 大相模不動様の晴嵐 | 7 寺橋の夕照 | 8 天嶽寺の晚鐘 |

小林村の虫追い

加藤幸一

増田卓司氏（東越谷八丁目五の四、大正十一年生まれ）によると、小林村の虫追いは昭和5・6頃まで行なわれていたという。小林村の鎮守の香取社から出発し、下の地図のように二手に分かれ追分（浜野商店）で合流した。そして最終地は増林村の手前の「小林の排水路」まできて、そこ虫追いは終了し、解散したという。

小林村の香取社の虫追いコース ⇒⇒



瓦曾根一丁目バス停あたりにあった「瓦曾根橋」（戦後は「平和橋」、後に廃止）に通じる

平成27年11月の越谷市市民文化祭の発表原稿を一部改訂

増森（増森本田）の「せい魚（ぎよ）」伝説

加藤 幸一

「せい魚」伝説は越谷市の増森ましもりと東京の隅田川の鐘ヶ淵との間の交流から生まれた伝説である。鐘ヶ淵はかつての綾瀬川が隅田川に流れ注ぐあたりにあった。江戸時代は向島むかしまと呼ばれた地域に属し、昭和初期になると向島区むかしま区（注1）が誕生する。この鐘ヶ淵での「せいぎよ伝説」について紹介する。

1. 江戸時代の鐘ヶ淵の沈鐘伝説（↓地図2）

江戸時代の隅田川にある鐘ヶ淵は、綾瀬川が合流するために舟人にとっては航路の難所として知られた所である。また隅田川の右岸の石浜にあった普門院が、隅田川の左岸に渡って亀戸村に移転する途中に、普門院の梵鐘を鐘ヶ淵に落として沈ませってしまったというような沈鐘伝説が江戸庶民の間に広まった。鐘ヶ淵の名称由来を示す伝説（注2）でもある。

その後、明治・大正、そして昭和になると、増森では鐘ヶ淵の沈鐘伝説とは違って航路の難所という観点から「せい魚伝説」が生まれたのである。

2. 架空の魚「せい魚」（↓地図1）

増森沿いをかつて流れていた古利根川に「せいヶ淵が」という

深い川底があった。そこに「せい魚が」と呼ばれる伝説の巨大な魚が淵の主として住んでいた。いつしか土砂の堆積で住みにくくなり水量も激減したので、「せい魚」は故郷を捨てて遠く離れた東京の隅田川の鐘ヶ淵へと移り住むことになる。鐘ヶ淵は綾瀬川が隅田川に注ぐ地点よりやや下流にあった（現在の墨田区立鐘ヶ淵中学校付近）。ところがなぜか鐘ヶ淵を通過する多くの舟を転覆させて暴れまわった。「増森舟（ましもりぶね）だよ」と伝えると、「せい魚」は自分の故郷の増森から来た舟と思い込み、その舟だけを転覆させることはなく無事に通過することが出来たという。

増森の小島専治氏（明治四十三年生まれ）からの聞き取り調査（平成十二年三月）によると、増森沿いの古利根川の対岸の川藤かわかふじえのきと榎戸の山崎家は屋号を「うしろっぱ」（後ろ端の意味か）と言い、その家の裏の古利根川には、地元で「ふかんぼ」（深んぼ）と呼ばれた水深数メートルほどの深みがあった。その「深んぼ」から上流百メートル程は「せいヶ淵」（現・共同工業の工場）と呼ばれていた。そこに「せい魚」伝説が生まれたのである。「せい」にあたる漢字は不明である。

せい魚がいたとする古利根川は、増森と吉川市の境を流れていたが、現在はこの部分は埋められて、その痕跡はない。

3. 増森東京 (↓地図2)

かつて古利根川沿いにあった増森は、人々の往来などで大正から昭和の初めにかけては大変な賑わいをみせていた。

松伏で醸造された醤油を東京に運ぶ高瀬舟がこの古利根川を通過。この頃は荒川放水路は出来上がっていないかった。東京へのルートは中川を利用した舟運に頼っていた(地図2)。

その頃、増森本^{ほんてん}田では晒^{せいせい}業が盛んであった。小島専治氏によると、ここでは製品は馬車で日本橋方面に運送されていた。後に「本田晒業」と書かれた一トン車のトラック二台ほどが初めて使用された。日常生活にかかわる商いの店も所々に見られた。こうして栄えた増森は、一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになったという。

4. かつての古利根川の渡し場とその後の「新川」開削

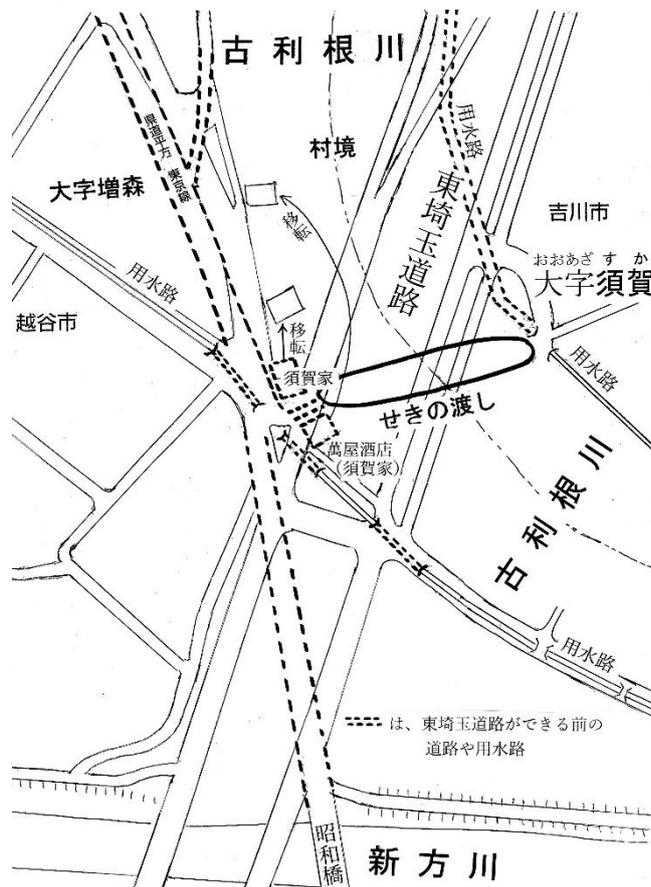
増森の山崎高義氏(大正七年生まれ)からの聞き取り調査(平成十二年頃)によると、昭和以降現在の増森沿いの古利根川の渡し場は次の三箇所である。(↓地図1)

上流から「馬渡し」(馬も渡したという。赤岩渡しとも呼ばれる。)、^{「ヤんごう渡し」}(榎戸渡しともいう。)^{「さんごう」}の由来は不明、渡し守の名か。)、^{「せき舟の渡し」}(せきの渡し)「^{「せき舟の渡し」}」の入口は、増森神社の南の三百

メートルほどに屋号が「渡し場」と呼ばれて代々渡し守を務め

た増森の須^{すか}賀家と屋号が「よろず屋(萬屋)」と呼ばれて酒店をしていたもう一方の須賀家の間の細い道である。現在、東埼玉道路ができて大きく変わった。(左図)

図「増森村と須賀村と結ぶ古利根川の渡し場跡」



増森の北を古利根川が流れており、増森の東側は東凸(とつ)に流れ、次に西凸に流れた(現在はこの西凸の部分は川が埋められていて見られない)。つまり逆S字の流路となって流れ下っていて、さらに新方川が入り込んで東流して吉川橋下流の中川(古利根川)へと続いたのである。(地図1)

大正十三年頃、現在でいう増森の梶原工業東京工場の東隣か

ら中島の送水管あたりまでを直線に掘って新川（地図1の右）が完成すると、今まで増森村の東側を曲流していた古利根川に入る水量が激減し、それまでの古利根川の様相が一変した。新川の完成がきつかけで住みにくくなつたせい魚が、鐘ヶ淵に移り住み、この鐘ヶ淵の「せい魚」伝説が誕生したと思われる。※加藤のかつての昭和6年以降説をもとに記述

その後、この古利根川は工業団地誘致のために埋められて現在には昔の名残はない。

5. 「せい魚」伝説の成立時期（↓地図2）

「せい魚」が「せいヶ淵」土砂がたまり住みにくくなつたのは、大正の終わり頃に新川ができたせいであろう。さらに「せいヶ淵」から「鐘ヶ淵」に直接行けるようになったのは、昭和六年（一九三二）に花畑運河ができたおかげである。荒川放水路の出現によって中川舟運では荒川放水路を横断するための中川水門付近で舟の渋滞が見られるようになり、それを解消しようと足立区の北部に中川と綾瀬川とを結ぶ花畑運河はなはたができたのである。花畑運河の中川側には六木水門、綾瀬川側には花畑水門がある。

つまり「せい魚」は増森の古利根川を下って吉川橋の下流の中川（古利根川）、花畑運河、綾瀬川と泳いで進み、綾瀬川が流れ注ぐ隅田川の鐘ヶ淵にたどり着き、ここに移り住んだ

のである。花畑運河のおかげで綾瀬川舟運が盛んになった頃の話と思われる。

以上から「せい魚伝説」は、昭和六年以降に生まれたと推定できる。増森は、大正・昭和と東京との交流が盛んであつたらこそ、このような伝説が誕生したのであろう。

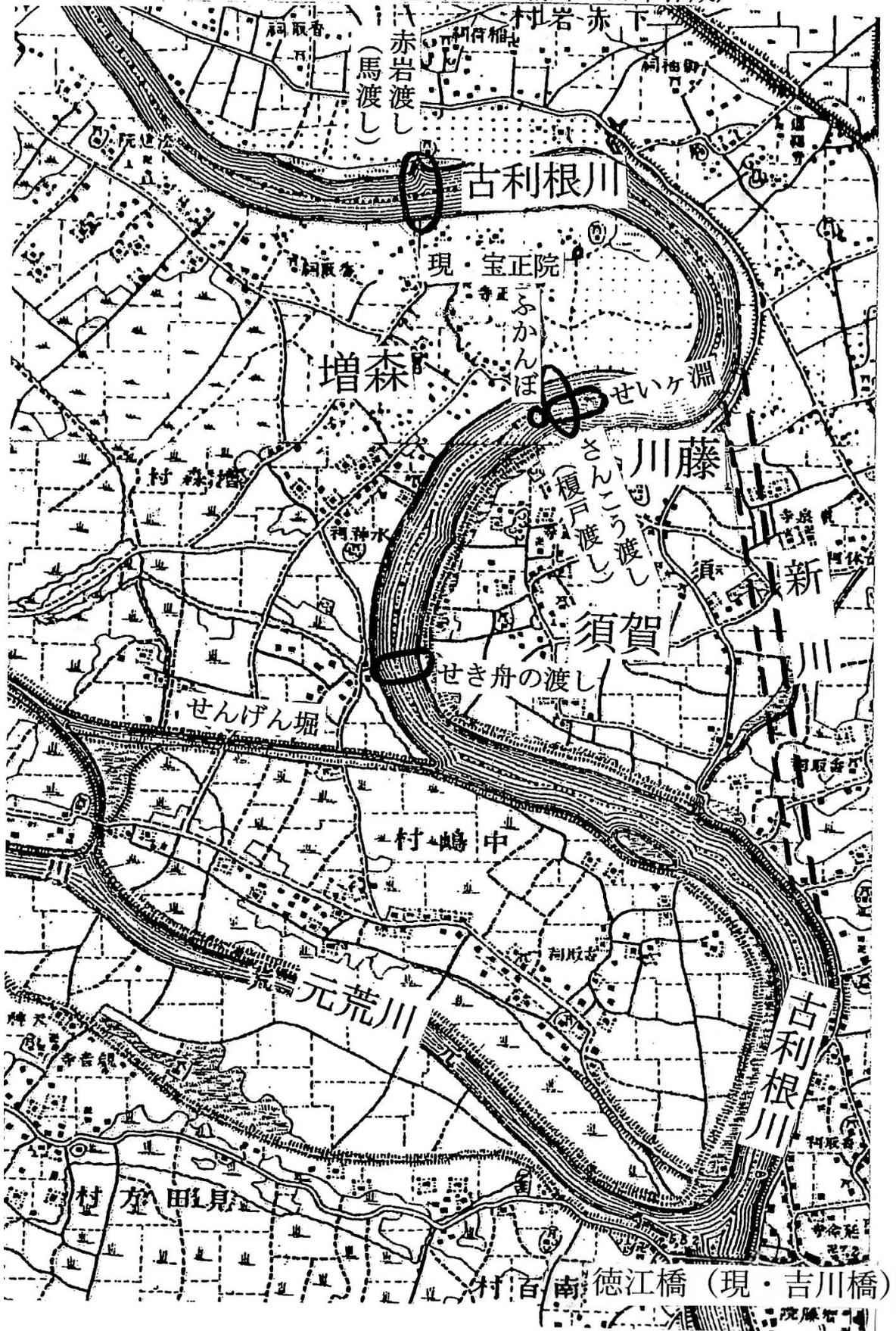
【脚注】

注1 向島区の誕生は昭和7年、戦後、南隣の本所区と合併して今の墨田区となる。

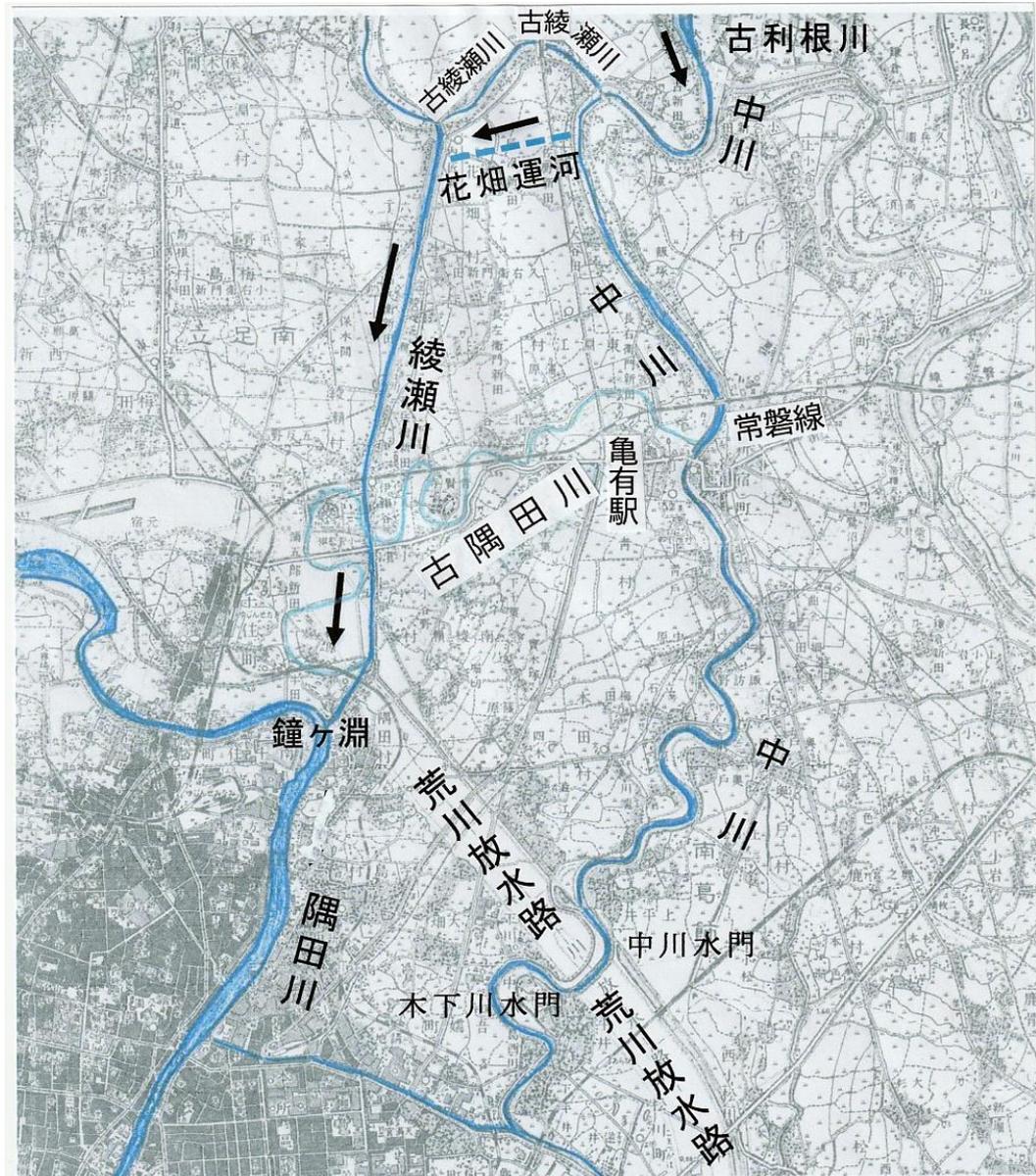
注2 隅田川が鐘ヶ淵のあたりで直角に曲り、それが大工の使う指矩（さしがね）に似ているところからこのように呼ばれるようになったのが由来とする説がある。

注3 「越谷市の史蹟と傳説」（越谷市教育委員会昭和35年4月15日発行）の一七九頁に題名として「セイヶ淵」（伝説）と書かれ、その解説文中では「セイヶ淵」となっている箇所もみられる。ゆえに読み方は「せいけふち」ではなく「せいがふち」と読む。平成12年3月の地元の小島専治氏からの聞き取り調査でも「せいけふち」ではなく、「せいがふち」と呼ばれたことが明確になった。

地図1 (明治13年測量の迅速測図・加藤幸一加筆作成)



地図2 花畑運河以南のルート



大正10年の「陸地測量部5万分1地形図」に鈴木恒雄氏及び加藤幸一が加筆

■■■■のルートを使わない「越谷市の史蹟と傳説」の明治10年頃との伝説

※昭和35年(1960)発行の「越谷市の史蹟と傳説」では「この伝説は、まだ増林村が[明治22年の]合併にならず、各村にわかれていたところの話であるから[1960年の]凡そ八十年前位のことであろう」として、明治10年頃の伝説としている。古老からの聞き取りであろう。鐘ヶ淵と繋がるルートは古綾瀬川と古隅田川の二つあったが、どれも江戸時代前期に締め切れ、直接鐘ヶ淵には行けなくなっている。

■■■■の花畑運河のルートを使う昭和6年(1931)以降との伝説

※東京と交流が盛んな時代であった昭和6年完成の花畑運河を取り入れた説である。

3. 増森本田の肥船

加藤 幸一

増森本田地域は、かつては他の周辺地域と同様にもろこし、粟（あわ）、大豆、麦などの雑穀を栽培し、自給自足の生活をしていた。

増森本田の東側を流れる古利根川は、大正十二年頃に新川ができると流れが緩やかになり、盛んであった晒し業も昭和十年頃は廃れた。代わって縄、菰（こも）などの藁工品作りで生計を立てた。それとともに田の肥料としては、東京から下肥（げんご）を使用するようになる。この下肥を運んだのが肥船（こえぶね）である。戦後の昭和二十四・五年頃まで続いたようだ。

肥船は古利根川と庄内古川の合流地点の下流の新川右岸に接岸された。そして船頭が一人乗った空の肥船が引き潮の時に潮にのって下流に向けて出発する。新川を通過して中川を下り、潮止橋の先の中川右岸の花畑（はなはた）運河まで来る。そこで中川と綾瀬川の満潮時に運河に入り、運河を通過して綾瀬川に入る。綾瀬川を下り、小管刑務所（現在の東京拘置所）の脇を通り、堀切橋あたりの水門（綾瀬水門）をくぐって荒川放水路を横断し、さらに川幅が狭い綾瀬川（足立区と墨田区の区境を流れる）に入り、鐘ヶ淵のところを隅田川に出る。ここは船にとって水難事故が起きやすい難所である。それから、隅田川を上って、千住大橋の約二百メートル先の右岸の船着き場に到着する。その場所は、釣り舟宿などを手広く経営している豊島（とよしま）家そばにあった。到着するのは出発した日の翌日である。

増森本田には、四・五十軒の農家があり、全体を二つに分けて交替で千住大橋のそばの南千住の船着き場まで出掛けるのである。夜が明けぬ五時頃に十五人から二十人くらいの集団が出發する。昭和二十二・三年頃は、自転車が二台前後に並んでロープで結び、さらにその後ろに空の肥桶（こえおけ）六本を積んだリヤカーに連結されて、自転車、自転車、リヤカーとそれぞれ一列に並び、それが八組から十組位できている。国道四号線を通って南千住の船着き場につくのは七時頃である。約二時間かかる。

昭和二十二・三年以降は、戦闘機の大きなタイヤ（大きさは今の軽自動車の程度で、太さはもっと太かった）を利用して大きなリヤカーを四台作り、船着き場そばの豊島家に預けるようになった。夜が明けぬ頃に自宅を自転車で出發し、越谷駅で東武鉄道を利用して北千住駅で降り、そこから徒歩で豊島家まで行くのである。

南千住の船着き場に到着すると、国道四号線の西側の南千住あたりの民家を手分けして一軒一軒のトイレから人糞を汲み上げ、肥桶を一杯にして肥桶六本をリヤカーに積み、船着き場の肥船と往復を繰り返すのである。後に大きなリヤカーを使うようになった時は、十二本を積んだ。昼食を挟んで午後三時から四時位までかけて肥船を満杯にする。

帰りは、見張り役一人を残して増森本田に夜になって帰ってくる。見張り役は船頭と一緒に肥船に乗り、きちんと下肥が送られるかを監視するのである。よく戸ヶ崎あたりで、地元の農家の人にこっそりと下肥を売り、その減った分だけ水を入れるという不正を防ぐためである。後には見張り役は二人に増える。それは、船頭と見張り役が組んでの不正防止は勿論、早く到着するようにと船頭の船の運航を助けるためであった。

肥船が次の日に彦成（現在の八潮市）あたりになると、見張り役の一人が増森本田に応援を呼びに行く。呼ばれた応援の人たちは、地元の言葉で「船迎（ふねむけ）」と呼んで船を迎えに行った。そしてここからが大変である。下肥を満杯に積んだ肥船をみんなで協力してロープで曳（ひ）いて（いわゆる「曳舟（ひきふね）」）出發地点の岸にもどってくるのである。

なお肥船は、吉川橋の上流二百メートルの吉川側にある「肥又（こえまた）」（屋号）がかかわっていた。また、増森の三丁野（さんちやの）の人々も空の肥船で千間堀（せんまほり）の新田橋（しんでんばし）のたもとから出發したという。

（平成十五年二月、増森本田の小島康男氏《昭和二年の生まれ》からの聞き取り調査）

ましもりほんでん さらしぎょう

増森本田の晒業 (昭和56年11月01日の「広報こしがや」の「越谷の民俗32」)

越谷の増森では江戸時代から晒業の盛んな所でした。明治年代35軒ほどあった農家のほとんどは、農業のかたわら晒業を営んでいたと言われます。

晒とは木綿布を白くする仕事で、石灰を入れた「アク桶」に木綿の生地をひたして河原に干します。これを何回も繰り返し返してから、古利根川の流れて水洗いして仕上げます。当時、古利根川は増森の河原崎から曲流し、現在の吉川町榎戸えのきどの地を迂回して流れていましたので晒の仕事をするにはよい場所であったとみられ、その生産量は関東でも一、二というように五本の指に数えられたほどでした。

仕上げられた製品の多くは東京日本橋の間屋に納められましたが、このうち越ヶ谷御殿町の会田染工場や越巻こまき(現新川町)の島村染工場などのように、近辺こまきの紺屋にも納められたといえます。

大正十三年、元荒川や古利根川の改修工事が行なわれましたが、このとき古利根川は、吉川町榎戸を分断して直流に改修されました。このため、増森の晒は河原での作業ができなくなり、それからは深い井戸を掘って井戸水を使うようになりました。こうして昭和の初め頃からは多くの農家が晒業をやめていくようになってしまい、ついには最後の一件となった富沢家が昭和十六年にこの仕事をやめ、晒は増森から姿を消しました。

一時、晒業の盛んであった頃は、増森の農家は現金収入が多く景気がよかったので、旅役者やゴゼ(盲女の唄うたい)などの芸人がたくさんやってきました。こうした人々は旅館を兼ねた「タナコヤ」と呼ばれた駄菓子屋に泊まりました。当時は「タナコヤ」が九軒ほど軒を連ねて賑わっていたといえます。このため近所の人々とは、増森が東京のような盛り場だということで、「増森東京」などと呼んでいたということです。

《増森本田ましまもりほんでんの敏米当木》
増森は、大正から昭和の初めにかけては最盛期を迎えていた。松伏の醤油が松伏から江戸に運ばれる高瀬船がここを通過した。増森本田では晒し業が盛んであった。馬車で江戸の日本橋方面に運送され、後に『本田(ほんでん)晒業』と書かれた一トンスのトラックがこの周辺では初めて使用された。また駄菓子屋、醤油屋、酒屋等の店も所々に見られていた。こうして一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになった。

加藤幸一

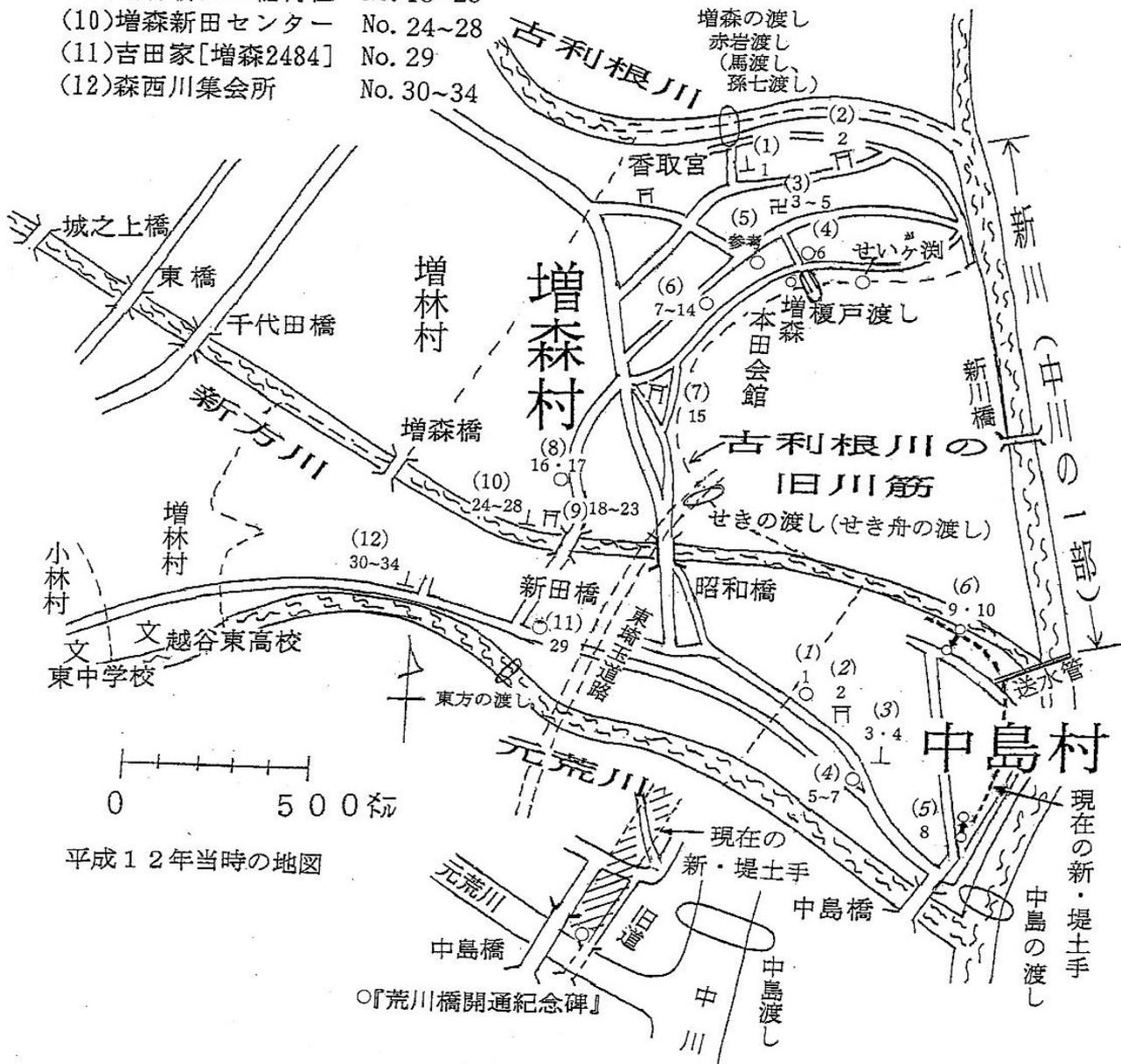
増森・中島の石仏案内図

増森村

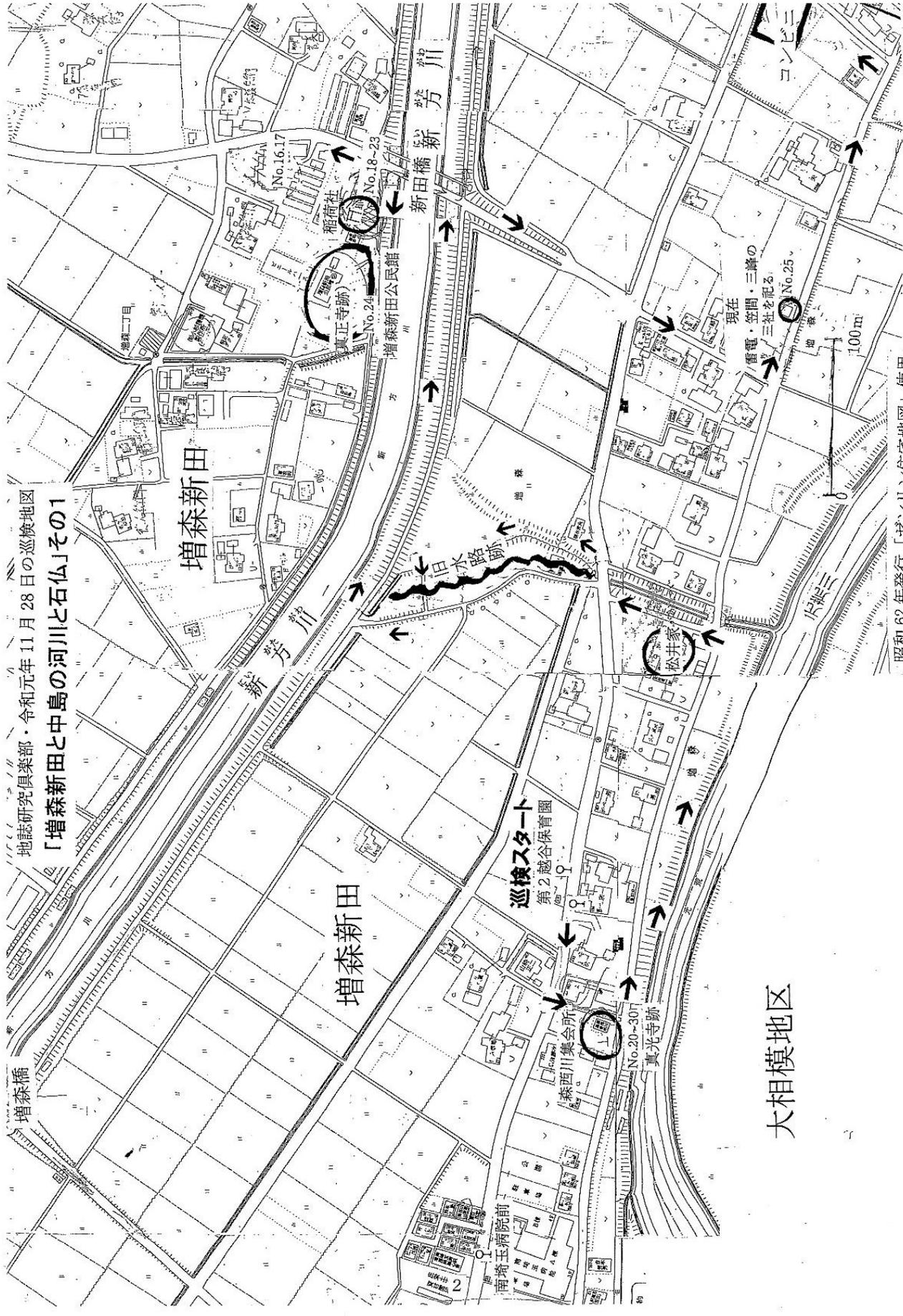
- (1) 観音堂墓地 No. 1
- (2) 河原崎の内田稻荷 No. 2
- (3) 宝正院 No. 3~5・35
- (4) 消防増林分団小屋 No. 6
- (5) 小島家[増森 1723-2][参考]
- (6) 薬師堂 No. 7~14
- (7) 増森神社 No. 15
- (8) 中村家[増森2-47] No. 16・17
- (9) 増森新田の稻荷社 No. 18~23
- (10) 増森新田センター No. 24~28
- (11) 吉田家[増森2484] No. 29
- (12) 森西川集会所 No. 30~34

中島村

- (1) 林家[中島1-79] No. 1
- (2) 中島神社 No. 2
- (3) 正福寺管轄の共同墓地 No. 3・4
- (4) 小川家[中島2-89] No. 5~7
- (5) 鈴木家[中島 2-119-1] No. 8
- (6) 送水管近くの路傍 No. 9・10

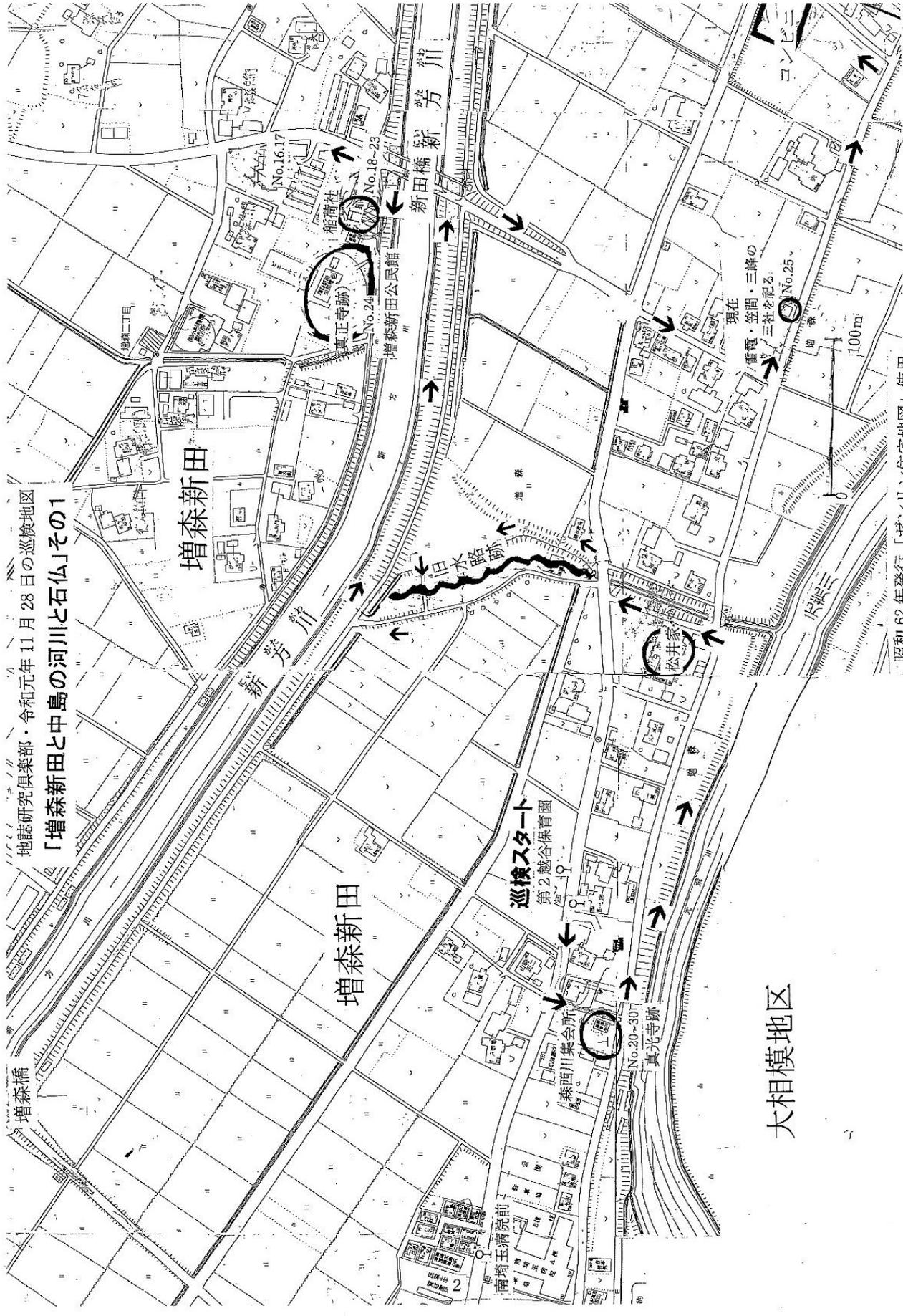


地誌研究倶楽部・令和元年11月28日の巡検地図
 「増森新田と中島の河川と石仏」その1



昭和62年発行「ゼンリン住宅地図」使用

地誌研究倶楽部・令和元年11月28日の巡検地図
 「増森新田と中島の河川と石仏」その1



昭和62年発行「ゼンリン住宅地図」使用

本林西川集木△云所

増林村の西川に対して、増森村の西川という意味で「森西川」という。この集会所の南側に墓地がみられる。この墓地は現在、元荒川に沿った道路の拡張工事にひっきり、集会所の北側に移転される予定である。

30・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三五番）

右側面では、越ヶ谷町や大相模の不動尊へ、左側面では、榎戸（えのきど）や赤岩渡し、野田への道しるべが刻まれている。

〔左側面〕

吉川道

〔正面〕

文化五辰年

寄嶋組

〔日月〕庚申

講中

（三猿）

西川組

〔右側面〕

三月吉日

〔裏面〕

越ヶ谷 大相模不動道

榎戸

赤岩渡し のた道

33・三猿庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二二番）

〔三猿〕のみ刻まれた初期の庚申塔である。

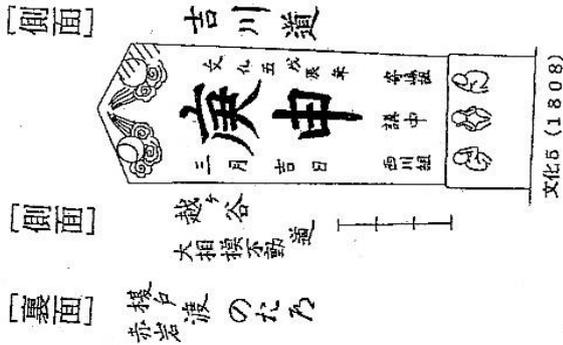
34・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一七番）

※「新光寺」の文字が見られる貴重な石仏である。これにより、ここは「真光寺」の跡地とわかる。寺名で「真」の字の代わりに「新」も使われたのであろう。

※これは、越谷市内最古の青面金剛像庚申塔である。これ以降、元禄年間からの「日月・青面金剛・二鶏・三猿」の型式の庚申塔が越谷市内を含む日本各地でよくみられるようになる。

30

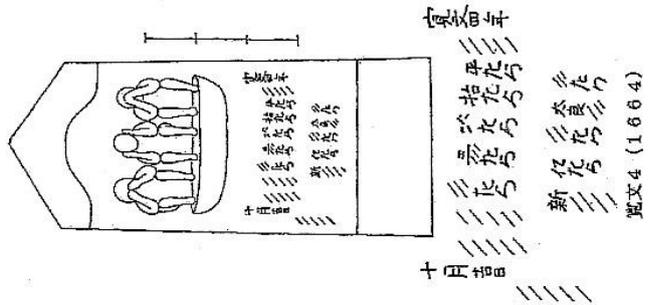
道標付き文字庚申塔 森西川集会所



文化5 (1808)

33

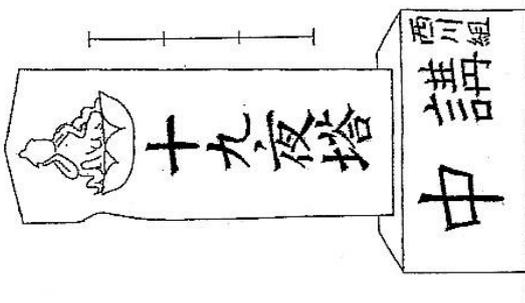
三猿庚申塔 森西川集会所



寛文4 (1664)

31

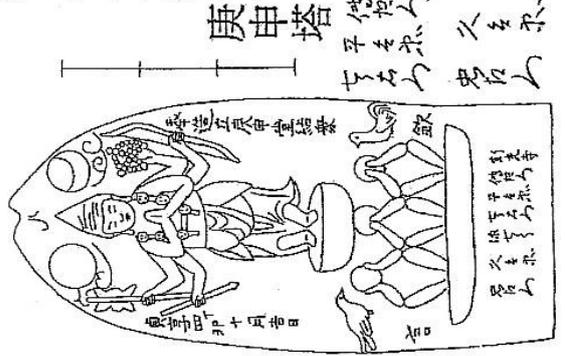
十九夜念仏塔 森西川集会所



寛永6 (1853)

34

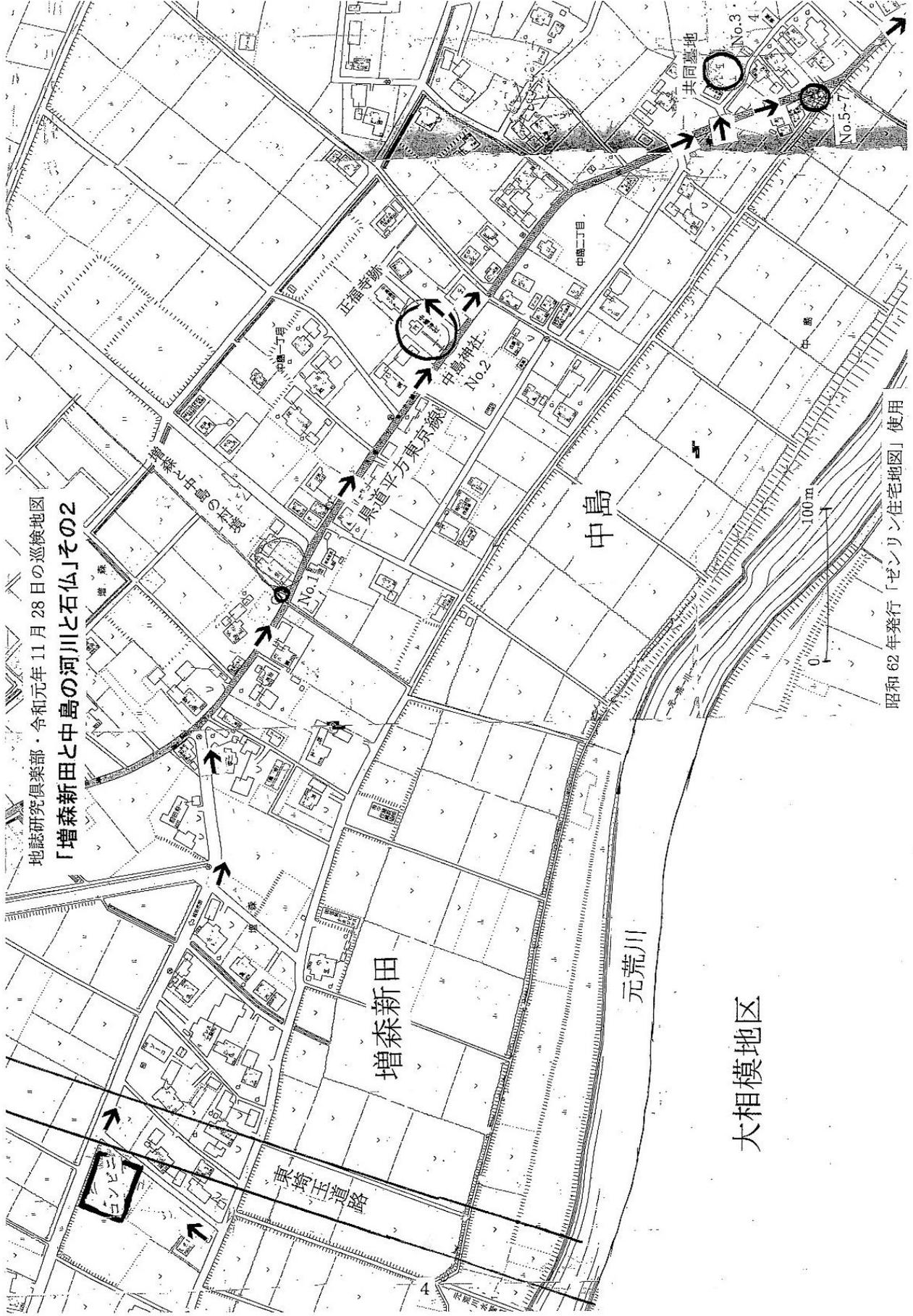
青面金剛像 森西川集会所



寛文4 (1667)

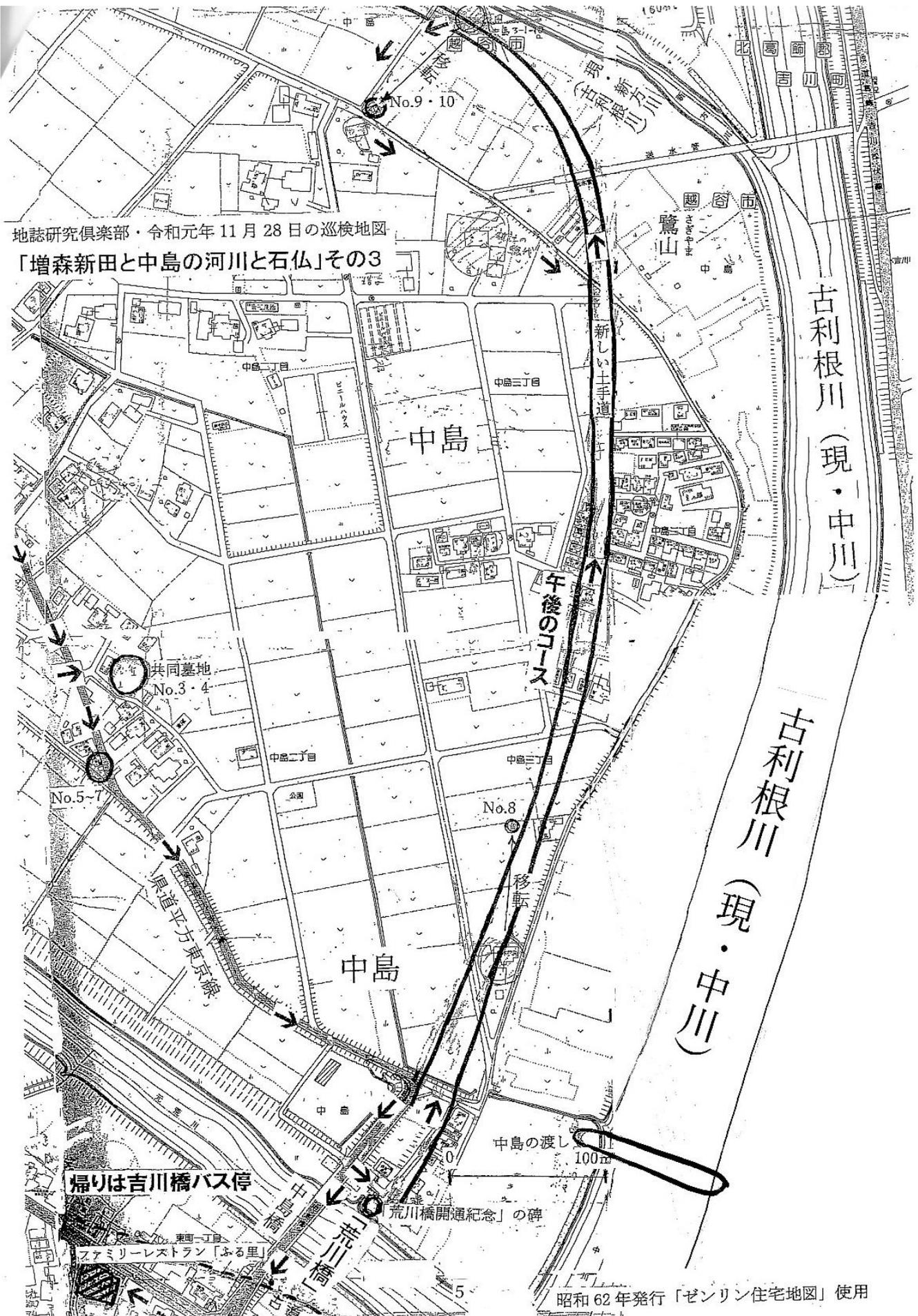
地誌研究倶楽部・令和元年11月28日の巡検地図

「増森新田と中島の河川と石仏」その2

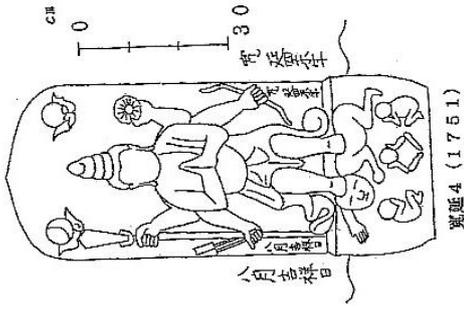


昭和62年発行「ゼンリン住宅地図」使用

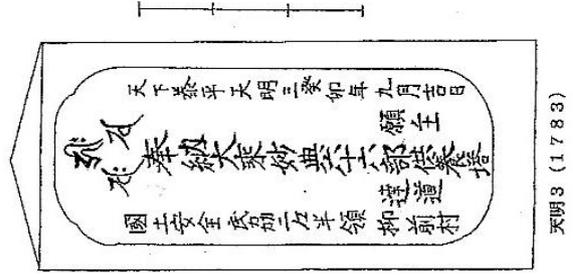
地誌研究倶楽部・令和元年11月28日の巡検地図
「増森新田と中島の河川と石仏」その3



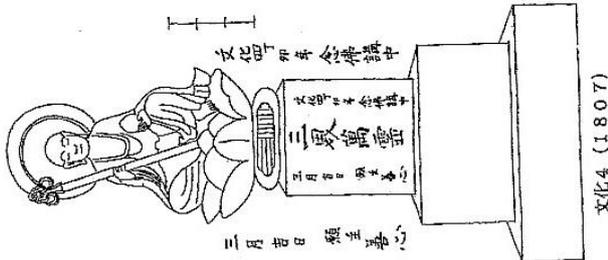
1. 中島 青面金剛像庚申塔 林家甲島二一九九



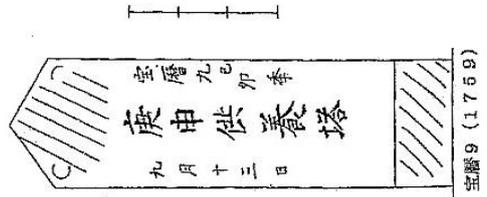
3. 中島 六十六部供養塔 正権寺霊體の共同墓塔



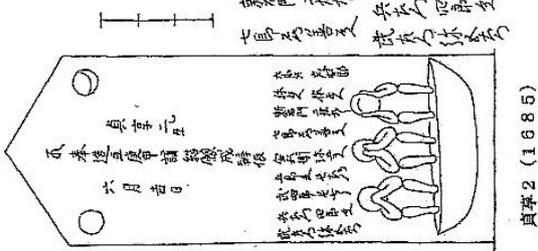
2. 中島 地藏像付き三界万霊塔 中島神社



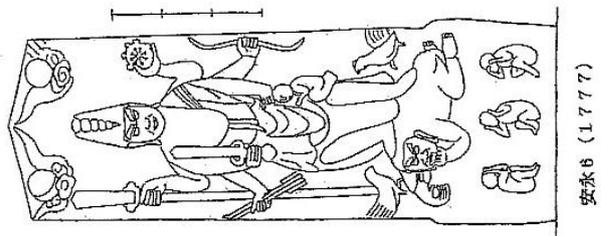
5. 中島 文字庚申塔 小川家甲島二一九九



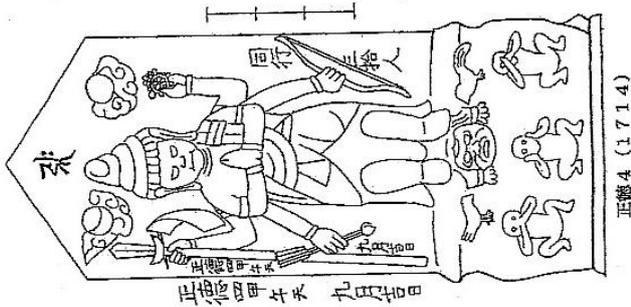
6. 中島 三猿庚申塔 安兵衛林堂



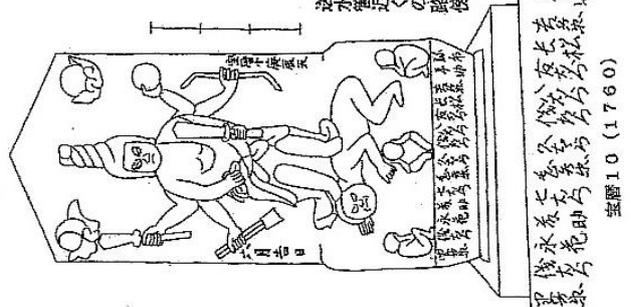
8. 中島 青面金剛像庚申塔 鈴木家甲島二一九九



7. 中島 青面金剛像庚申塔 小川家甲島二一九九



9. 中島 青面金剛像庚申塔 安永近くの路傍



中島神社及び正福寺跡

ここは、稻荷神社と諏訪神社の両神社（ともに中島村の鎮守、現在は合祀）と正福寺（しょうふくじ）と呼ばれる寺院があった地である。

2. 地藏像付き三界万霊塔（『越谷市金石資料集』名号一八番）

所在地 中島・中島神社

石塔型式 丸彫型及び角柱型（南東向き・高さは高）

年号 文化四年（一八〇七）

〔左側面〕

「台石」

妙善法尼

刃著鮮山信女 享和元 四月廿四日

本空童子 安永五 三月十四日

※妙善法尼の没年は記載されていない。

〔正面〕

文化四丁 卯年 念仏講中

（地藏菩薩座像）二一 田介 苗内 雷並

三月吉日 願主 善心

〔右側面〕

周光童女 安永九子 十月十四日

教圓童女 天明六年 九月十七日

是空童子 天明八 十二月廿二日

※戒名の頭に「刃」を付けるのは余程の事情があったものと思われる。

四人の愛する子を相次いで亡くした哀しみから自刃を余儀なくされた母とその幼子女を吊って建立された石塔であろう。建立した人は善心であり、「刃」の文字を付けて「刃著鮮山信女」（母の戒名）を作成した人は妙善法尼と思われる。

文化四丁卯年 念仏講中



中島橋の北詰めに、高さ百センチの自然石の記念碑がある。かつてはこの碑が建っていたところに元荒川の上に「荒川橋」が架かっていた。

◎「荒川橋開通記念」の石碑

所在地 中島・中島橋北詰め（中島五一六の須賀家南側路傍）

石塔型式 自然石（南西向き・高さは中）

年号 昭和五年（一九三〇）

〔正面〕

世元川橋開通通紀念心

〔裏面〕

増林村前村長

今井 晃

増林村助役

山崎 長吉郎

岩槻前工区長

吉澤 皆三

常設委員

林 浅右工門

杉山 末吉

昭和五年五月竣功

経営者

鈴木 吉五郎

経営者

内野清右衛門

経営者

内野勝太郎

吉川町

石工

鈴木初五郎

※記念碑の中に四人の経営者の名前が刻まれている。荒川橋の建設資金を出した地元の人たちである。荒川橋の完成後、この橋の北詰め（中島五一六の須賀家の南側）に小屋を作って、四人が交替で小屋に待機し、この橋の渡し賃を徴収した。徴収した渡し賃は片道は二銭、往復は三銭であったという。

なお、現在の中島橋は初代「荒川橋」から数えて三代目にあたる。

《中島の渡し》

かつてあった「中島の渡し」は、現在の杉山商店北側より渡し場に入り、中川を渡っていたのである。

なお、この近くには「中島の渡し」の他に、現在の吉川橋あたりにはかつて「南百の渡し」があったが、明治七年にこの渡しに代わって平沼村（現、吉川市内）の徳江忠次郎が自費で作った木製の橋が架けられた。

（徳江橋）

増森新田の「清学院」(概要)

1. 松井家の江戸時代の墓石と清学院

かつて松井家の南側道路の河川側に微高地の畑地が広がり、その先の元荒川沿いの堤外地(河川敷)との境に段差があった。その段差そばの畑地側に松井家の墓地が東西並んであったという。南側道路の河川側にあったその墓石群は昭和三十年代前半に松井家敷地内の現在地に移された(松井家より戦後の墓地跡の聞き取りをする)。

松井家によると、さらにそれ以前は畑地の下の堤外地にあったという。堤外地の西側部分あたりである。川が増水すると水没する堤外地になぜあったのか謎であるが、明治初期の廃仏毀釈に起因するのではと推測できる。つまり、仏教の寺院や仏像・仏具・経巻などを破棄する動きが全国的に起こり、ここでも仏教の墓石が堤外地の河川敷に捨てられたのではないかと思われる。敷地内には、元荒川側に長屋門、東側の水路沿いには、かつては潜り戸のある黒門があった。

船着き場からの高貴な人の為の長屋門や特別な玄関(式台付き?)があったと思われる、複数の部屋があり掛軸や使用人も見られた。松井家には鷹狩りのために立ち寄ったとの言い伝えもある。



「昭和62年 ゼンリン住宅地図 越谷市」を元に作成 (加藤幸一)



松井家の長屋門の前には元荒川が流れており、將軍の鷹狩りの際に使われた船着き場があった。長屋門を入った自宅も將軍の休息に利用されたと伝わる。東側にくぐり戸付きの黒門があった。

松井家の敷地内墓地には、「清学院」と刻まれた墓石がある。寛保三年(一七四三)没の清学院恵芳の人物である。この時点では「清学院」の院号を使っている。

実は、清学院の院号は既に使われていたことが松井家文書によって判明した。つまり「清学院」の始まりは、元禄六年(一六九三)の頃まで遡れるといえようか。

清学院の本尊は不動明王である。先祖が大坂から笈に入れた不動明王像を背負ってこの地にやってきたとの言い伝えが残る。その時に刀などを所有していたということから武士の出身と思われる。

松井家は山伏(修験道)の家柄であるが、そのかたわら「松井大学」として学問も教えていたのである。

2. 松井家の明治の頃の様子

天保二年（一八三一）生まれの松井雄宣は現在の越谷市及びその周辺で、増森村の水神社、中島村の稻荷社など十一ヶ村の神社を兼務していたほか、松井家代々の言い伝えによると、越ヶ谷の久伊豆神社の神職にも関わっていたという。池田多計子の実家は越ヶ谷町と思われ、その実家の池田十馬之輔が七星正泰、松井雄宣と共に越ヶ谷の久伊豆社の神職にも携わったことがあるのであろう。

十馬之輔が明治八年（一八七五）二月十三日付けで久伊豆社祠官（神主）の訓導に兼補（迎摂院住職）された文書がある。「越ヶ谷宿第三番屋敷居住、池田十馬之輔、天保三年（一八三二）壬辰九月出生、明治十二年（一八七九）五月四十六年九ヶ月（年齢）」との文書もあり、十馬之輔は越ヶ谷町出身であることがわかる。久伊豆社の神職は十馬之輔方の池田氏が跡を引き継いだのではないだろうか。松井雄宣の後は松井家では神職を受け継がなかった。なお、池田十馬之輔氏は、松井家によると、越谷本町の現在の大沢橋の南西角地の三百坪と伝わる広い土地に住んでいたそうである。

松井雄宣氏の墓



岡田勢以子

明治四年九月四日没

享年四十歳

前祠堂松井雄宣之墓

池田多計子

※「司掌」は神主、岡田勢以子は、松井雄宣の前妻、池田多計子は雄宣の後妻。
※多計子は嫁ぐ時に菊の御紋（十六葉八重裏菊）が付いたお盆を持ってきている。

明治期の越ヶ谷の久伊豆神社の神官・松井雄宣



後世の肖像画（平成7年頃描く）
※雄宣は、修験道の修験者から明治元年に一旦還俗してから神主になっている。

明治以降の越ヶ谷の久伊豆神社の神官の推移（推定）

七星貞算——七星正泰・池田十馬之輔 ↓池田吉兵衛 ↓池田悦太郎 ↓戦後・小林茂 ↓一朗氏 ↓威朗氏

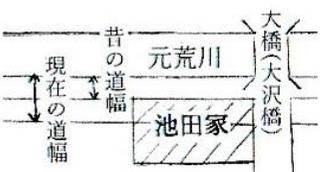
〔七星貞算〕 〔池田十馬之輔〕 〔松井雄宣〕越ヶ谷の久伊豆社にも関わった（松井家の言い伝え）

迎摂院住職と越ヶ谷の 池田染之助？ 江戸期から寺子屋、山伏の清学院として続く増森松井家

久伊豆社の神職を兼職 明治八年に教導 明治六年増森の水神社・中島の村社等の神職を務む

明治四年に没 職の訓導となる 明治十七年に神道の大成就の訓導となる

越ヶ谷の久伊豆社の神職を兼ねた迎摂院の七星貞算は明治4年に没。跡を継ぐ七星正泰のもと池田十馬之輔は神職に付き明治8年に訓導、明治12年に権少講義。大講義の正泰は翌年に権少教正に。松井雄宣は神職に就き明治17年に神道大成就の訓導となる。



※越ヶ谷の久伊豆神社の神官については小林威朗氏から多大な協力を得たことをここに記す。

越谷市民がほこれる『中島の鷺山』

山本泰秀

増林地区の中島地域には、春から夏にかけて鷺の集団が東南アジア方面から大群で飛来して、繁殖行動と子育ての為に住み着く場所がある。中川と新方川の合流地点の新方川の中島側河川敷である。この合流地点には、越谷市中島と吉川市に架かる中川水管橋（庄和浄水場水管橋）があり、そのすぐ下流である。

鷺が飛来するこの地域は、現在は国有地となり、河川保全区域となっていて、竹・桜・リンゴ・イチヨウ・胡桃（くるみ）・梅・栗・棕（むく）・シュロ、その他多数の雑木が生い茂り、今でも木々がそのまま現存して自然がよく残っている。

小鷺、中鷺、中大鷺、あま鷺、ごい鷺などの大群が、春の彼岸の頃になると、南から飛来し、群棲する。竹やぶの竹の枝に、樹枝や樹皮で直径三十五センチメートル位の粗雑な巣を作る。そこへ青色の卵を四個程産卵する。鶏の卵と同じ位の大きさである。五月から八月にかけての育雛期には、約三倍程の数に増える。そして、秋の彼岸の頃になると、次第に飛び去っていく。中鷺、あま鷺は、夏鳥なので、台湾、フィリピン、マレーなどの南方へ飛んで行き、冬を越すのである。一方、小鷺は、古利根川、元荒川沿いで、一年中、内地にとどまっている。

鷺が多くいたとしても、繁殖行動の見られない地域は「鷺山」とは言わないが、ここは繁殖行為を伴っているので、「鷺山」と言えるのである。

中島の鷺は、地元住民の話では、十六年程前（平成三年、2007年頃）から数羽が住み始め、最盛期には二百から三百羽程に膨れあがったという。

一般には、鷺山近隣の住民にとっては、鷺山は迷惑なことであり、鷺の一日中の鳴き声、鷺の糞の臭いやほこりなどに耐え難くなり、追い飛ばしてしまうそうである。

しかし中島の鷺山は環境的には最適と思われ、広大な国有地であり、中川に隣接し民間住宅からはかなり離れている。それ故にここでは周辺の住民も鳥の公害に悩まされることはないのである。

ちなみに中島の鷺山は、中島から眺めるよりは、対岸の吉川市川野、川富地区からの眺めが良いことを一言申し添えておく。



越谷市中島の鷺山



平成19年5月 吉川市吉川 豊田勝氏、吉川側から撮影

越谷市の中島の葱栽培

山本 泰秀

中島の耕地は地元で「いなご土^{つち}」と呼ばれる粘土質であり、葱畑が目立つが、ここでは深谷と比肩する程の良質な葱が作られている。この中島の葱は、潮止村^{しおどめ}（現八潮市）から新品種の葱種が昭和初期に入ってきたようである。中島の故杉山卯八氏の話によると、戦前に八潮市旧潮止村の篤農家から種を譲り受けたという。「黒一本太葱^{くろ ひとつねぎ}」の誕生である。中島地区の自家用菜園で栽培していたようで、国家統制令の戦時下では自由販売ができず、葱は吉川の市場に闇で出荷された昭和十七年頃の話である。

昭和二十五年六月に山柏葱市場^{やまがし いちば}を開業した星野政司は越ヶ谷三丁目の明誌社の南隣の星野家に生まれる。北千住にある千住葱は、葱専門の葱商が扱う葱であり、星野氏の「山柏」がその一つである。その葱の特色がとても甘く、張りがあり、艶もある。甘いメロンの糖度が十四度であるのに対し千住葱は十七度もある。

千住葱の主たる生産地は埼玉や千葉で、昔から良い葱は足立区の千住の市場に出荷され、市場へ農家の人々が荷車に葱を積み込んで牛にひかせたりしたという。古くは江戸の昔、蕎麦屋が「一本で薬味がどんぶり一杯もとれる。」と言う評判をとったのが始まりで、その後、焼き鳥屋、すき焼き屋、鍋屋などが「白身が長いだけでなく、焼いてもよし、煮てもよし、おまけに日持ちもする」と先を争って使い始めたという。

野菜の統制の解除された昭和二十七年頃から三十年まで山柏（千住市場）迄行くには自転車に括り付けたリヤカーで運んだ。二時間かけて中島から千住迄、夜六時か七時に中島を出発した。山柏には寝泊まりする部屋が用意されていた。

最後に中島の葱の原産地の潮止の葱について触れる。潮止村の葱栽培は天保年間に東京府南葛飾郡砂町から「千住葱」の原種を取り寄せて試作したのが始まりとされ、京浜市場を持つ関東近県の葱栽培と同様「千住葱」栽培の発展に寄与している。

※中島で栽培される葱は、「千住葱」(越谷葱)として有名である。

※中島では、かつては増森とともにレンガ業が盛んであった。

令和6年度

越谷市立図書館主催の郷土歴史講座

「増林地区南部の歴史」

—増森村・中島村・花田村・小林村—

現地研修：マイクロバス・ルート地図

加藤幸一

はなた せんげん にいがた
花田の千間堀(新方川)に架かる橋

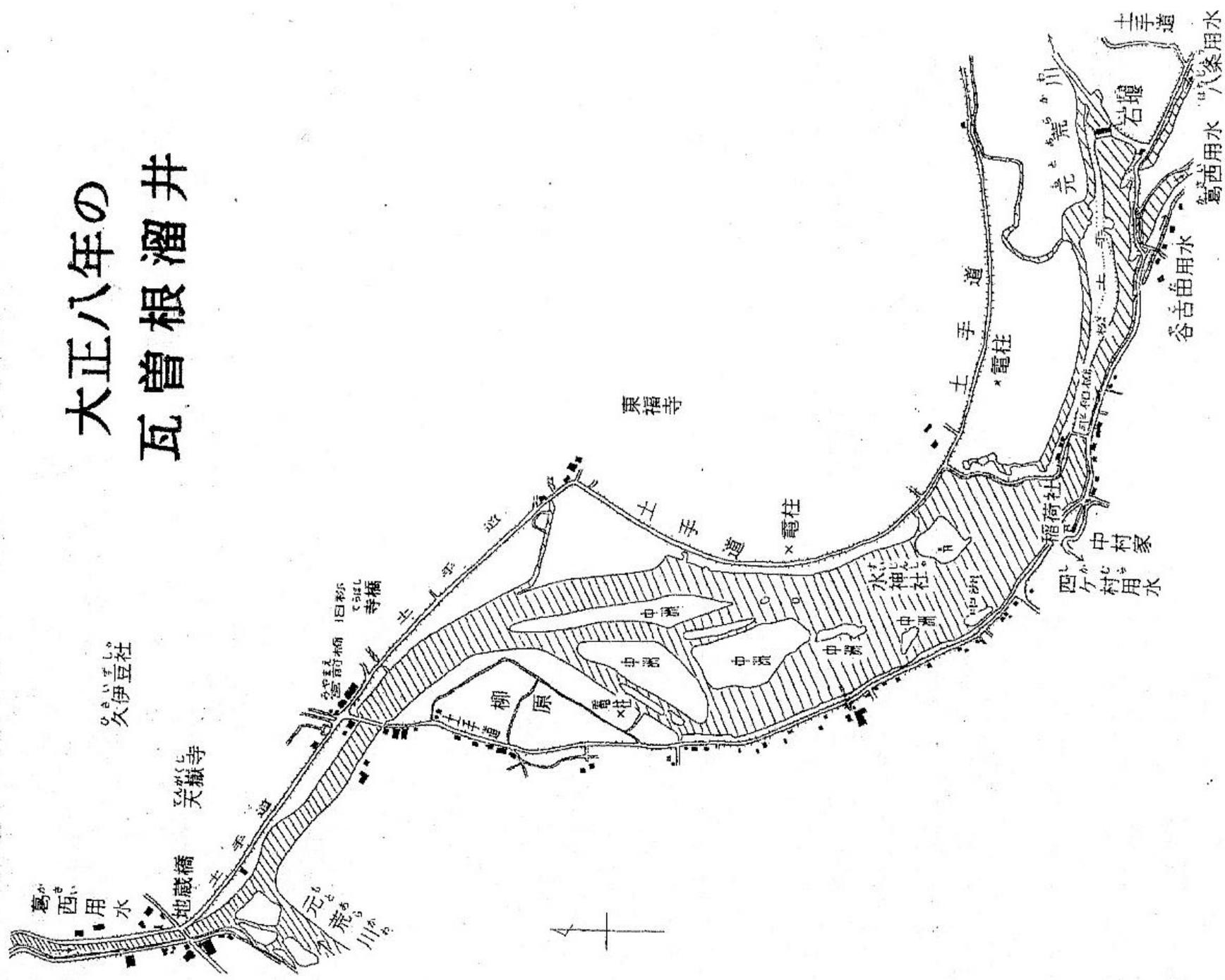
昭和5年にできたコンクリート製の「鷹匠橋」。現在2代目。
大林の宮内省鴨場の鷹匠が渡った橋。

人が一人しか渡れない、かつての「城之上(しろのえ)橋」。今は無い。
欄干のない土橋。鷹匠が使っていたために俗称「鷹匠橋」とも呼ばれた。
後の昭和5年に上流に現在の「鷹匠橋」ができる。

本来は、「^{いちみち}市道橋」と呼ばれた。昭和の初め頃にコンクリートの橋に。
この時に、後に上流にあった、かつての「城之上橋」の名前に変えた。

《現在の鷹匠橋の下流にあった旧・「城之上(しろのえ)橋》
花田第一樋門の西隣あたりに、人が一人通れるくらいの千間堀に架かる橋があった。
この橋は、当時は「城之上(しろのえ)橋」と呼ばれた土橋で、増林の上組の人も
「城之上橋」とよく呼んでいた。
明治四十一年にできた大林の宮内庁(当時は宮内省)の鴨場に勤める鷹匠が、
旧増林村の地域で鷹の訓練をしていたため、この土橋を地元では、「鷹匠橋」とも呼んだ。

大正八年の 瓦曾根溜井



『埼玉縣北葛飾郡松伏溜井 葛西用水路ヲ經テ 同縣南埼玉郡瓦曾根溜井間
現狀図』(大正八年七月測量製図 鑑定人 木邑富蔵 坂本茂一郎)のうち
第三号の地図をもとに作成 作成者 加藤幸一



東町1~3.5丁目	あずまちょう	G-8	大根
伊原1.2丁目	いしはら	E-10	川藤
大里	おおさと	C-5	桜井
大沢	おおさわ	D-5	大澤
大沢1~4丁目	おおさわ	C-6	大澤
大杉	おおすぎ	E-4	新大
大竹	おおたけ	B-4	大澤
大井	おおどり	D-3	桜井
大野	おおのや	C-5	大澤
大房	おおぼう	C-5	大澤
大森	おおまつ	E-3	新大
大鷹野町1~5丁目	おおたかのちよう	C-9	出雲
大道	おおみち	B-4	大澤
大吉	おおよし	E-5	新大
小曾川	おそがわ	A-5	大澤
鷹匠	おとぎわ	B-4	大澤
恩田新田	おんましんでん	A-3	大澤
が上南久里	がみまくり	C-4	桜井

平成10年頃、地元の古老(須賀健一氏)によると「御獵場(埼玉鴨場)の鷹匠は北から千間堀沿い(左岸)にやってきて対岸に渡り鷹の訓練をした」という。それを元に鷹匠のルート推測した。加藤幸一

1. 埼玉鴨場(鷹匠)
2. 大房薬師堂跡
3. 東福院跡(推定)
4. 大林寺(だいらんじ)
5. 大林村の香取社
6. 弥十郎会館(観照寺跡)
7. 昔の「城ノ上橋」跡
俗称:「鷹匠橋」

埼玉鴨場の鷹匠が増林での鷹の訓練のために通った古道
明治13年測量の迅速測図より推定

市役所周辺拡大図